

# 当館所蔵の「絵入り本」解題⑤

星 瑞穂

はじめに

本稿は『北の丸』第四八号に掲載した拙稿「当館所蔵の「絵入り本」解題④」に続くものである。

本稿も前回同様、『改訂 内閣文庫国書分類目録』における「国文」の項目に挙げられている資料から、「絵入り本」を抽出して調査し、目録題の順序に拠って解題を掲載する。なお「絵入り本」の定義であるが、上記に挙げた「国文」の項目のうち、内容に添う挿絵・地図・図版など、本文中に挿絵を伴うものすべてを対象とした。

また本稿の【一六九】からは、挿絵を伴う卷子装の資料の解題を掲載している。この卷子装の資料については「国文」の項目以外からも抽出している。

【一五九】〔楽器装束抄〕 写年不明 二冊

興田吉従旧蔵 「請求番号一九九・〇一五五」

本書は雅楽に関する、楽器、衣装などの図版資料である。乾坤巻二冊。装束に関する図版が中心となる。彩色は施されていないが、注記で細かな

色の指定がされている。面、衣装、冠、小道具、楽器、さらには舞台や帳などの設えまで網羅。乾巻冒頭部分に各曲ごとに用いる装束などがまとめられている。(毎半葉約九行、字面高さ約一八・〇糎)

乾巻二八ウまでは面の図版、二九ウから三五オまでが衣装の図版、三六オから末尾までが楽器の図版である。坤巻はすべて衣装の図版。一部、朱書きで訂正が見られる。

本書には奥書が存在せず、写年・書写者ともに不明である。

なお、本書は、漢学者で国学者でもあった興田吉従の旧蔵書。興田吉従は、若狭小浜藩の藩儒で、西依成斎に垂加神道を、本居宣長に国学を学んだ人物で、神道関係の著作を多く残している。生没年は未詳であるが、その活動の中心は文化年間であった。

本書はそののち天保七年に、昌平坂学問所に納められている。学者の旧蔵書に関しては、その没後に遺族から献上された場合が多いが、本書の場合には詳細は不明である。

【書誌】

外題・「楽器装束抄 乾(坤)」左肩四周単辺刷題簽に墨書(一九・八糎×四・〇糎)

内題・なし

表紙・原装紺色横刷毛目表紙(二七・〇糎×一九・三糎)

墨付丁数・①五六丁、②五四丁

挿絵枚数・①八七図、②一〇八図

匡郭・なし

印記・「居由齋蔵」（興田吉従蔵書印）「昌平坂学問所」「天保丙申」「浅草文庫」「内閣文庫」「日本政府図書」

【写年・書写者】

本書には奥書がないため、写年は不明。天保七年に昌平坂学問所に新収、またそれ以前の所蔵者である興田吉従が文化年間を主に活動の中心としていることから、少なくともそれ以前に書写されたことが想像される。

【一六〇】舞楽正図 写年不明 一二枚

内務省旧蔵 「請求番号一九九・〇一二五」

本書は舞楽図の下絵を折帖に仕立てて表紙をつけたもの。全十二枚。

舞人を中心とした図で、一部、冠、面などの拡大も含む。注記が墨書で施されているが、これらは有職故実に関する解説ではなく、すべて顔料などの指定。したがって、本書は舞楽の資料ではなく舞楽図の下絵であると判断されるものである。高島千春の手による『舞楽図』と共通する図案が多いが、前後関係は不明。

一部を除いてすべて彩色。第六図、第九図、第一一図のみ彩色なし。第十一図に関しては下書の朱線が残っている。

大きさは一二枚すべてで異なっており、表紙はおそらく後補である。す

べて同一の書写者の手によるものと思われるが、第一〇図のみ彩色が他とやや異なっており見える。およそすべて同筆と考えて間違いないのだが、他の図がすべて「明治十五年購求」の朱印を押されているのに対し、第一〇図のみ「明治十三年購求」となっており、一図のみ収集時期が異なる可能性もある。ただし、表紙は同一のものであるので、仮に収集時期が異なるとすれば、明治十五年以降にまとめて表紙をつけた可能性が考えられる。以下、図ごとの演目と大きさ。

- ① 「狛梓」「喜春楽」(三七・〇糎×一〇七・〇糎)
- ② 「抜頭」(三六・五糎×五〇・五糎)
- ③ 「青海波」(兜)(二六・五糎×三五・三糎)
- ④ 「林歌」「安摩」(三二・四糎×七二・八糎)
- ⑤ 「万歳楽」「延喜楽」(三九・八糎×一六・四糎)
- ⑥ 「皇仁庭」(兜)(一六・二糎×三六・四糎)
- ⑦ 「綾切」(面)(二七・二糎×三八・五糎)
- ⑧ 「貴徳」「胡飲酒」(二六・二糎×一一・〇糎)
- ⑨ 不明(二六・二糎×三六・四糎)
- ⑩ 「皇仁庭」(面、兜)(三八・〇糎×六〇・五糎)
- ⑪ 「太手楽」(四〇・〇糎×三六・八糎)
- ⑫ 「八仙」「陪臚」(四七・〇糎×九一・〇糎)

【書誌】

外題・「舞楽正図」中央四周双边刷題簽に墨書(二七・〇糎×三・〇糎)  
内題・なし

表紙・改装金茶色表紙(二六・二糎×一八・二糎)

墨付丁数(挿絵枚数)・一二枚

印記・「大日本帝国図書印」「明治十三年購求」（第一図のみ）「明治十五年購求」「日本政府図書」

【写年・書写者】

本書には奥書を欠くため、写年・書写者ともに不明。高島千春の『舞楽図』の影響下にあるとすれば、写年は明治頃と考えられる。明治期に内務省により購入された。

【一六一】〔舞楽図稿〕

写年不明 四軸

田安德川家旧蔵〔請求番号一九九・〇四五二〕

本書も前掲書同様、舞楽図の下絵である。一部手彩色。卷子装で四軸。高さ三四・二糎の大型絵巻。絵師は不明。

四軸はそれぞれ表紙に「春」「夏」「秋」「冬」の打付書がある。表紙の見返しに曲名が出されているが、料紙の経年劣化の度合いからみて、後補の可能性が高い。②③④に関しては曲目が左右に分けられている。

本文部分では、絵の右肩に曲目が出されている。①に関しては色変わり料紙に墨書。途中から打付書になる。彩色に関しては一部分のみ。丹緑が基本だが、他に装束の色に合わせて桃色などもある。胡粉での修正箇所も見られる。

本書表紙には「猷英楼図書記」の墨印があり、田安德川家の旧蔵であったことがわかる。殊に初代の田安宗武は、荷田在満や賀茂真淵とも交流した国学者で、特に有職故実の研究に関しては多くの著作を残している。本

書との関係性がうかがわれる。

【書誌】

外題・「舞楽図稿 春（夏・秋・冬）」打付墨書

内題・なし

表紙・砥粉色横縞（刷）文様

高さ・三四・二糎

印記・「猷英楼図書記」「秘閣図書之章」

備考・厚手の斐楮混ぜ漉き料紙

【写年・書写者】

奥書を欠くため、写年・書写者ともに不明。

【一六二】享保八年御有掛入御祝儀於小御所 舞楽御覧構図

写年不明 一枚

旧蔵者不明 「請求番号一九九・〇二二三」

本書は、享保八年三月十一日に京の小御所で舞楽が行われた際の、小御所の見取り図である。天皇と法皇の御座所や公卿の拝謁所の位置が明記され、さらにどの場所にどのような調度品が置かれたかなどが記される。

一枚図を八つ折にして、金茶色の表紙が付けられている。彩色はされていないが、色料紙を切って貼り付け、わかりやすくしている。特に、設置された屏風の種類や数を詳しく明記してあるのが特徴である。『源氏物語』

や『伊勢物語』の絵を描いたものが多く用いられたようである。

一条兼香の日記『兼香公記』によると、帝、法皇の行幸があつて舞樂を見物したという。このときの帝は中御門天皇、法皇はその祖父で長年実権を握っていた靈元法皇であると思われる。春庭樂、万歳樂、延喜樂、散手、貴徳、太平樂、胡徳樂、喜春樂、白浜、陵王、納曾利などが舞われた。靈元法皇の七〇歳を祝うものであつた。  
なお、本書の旧蔵者は不明である。

#### 【書誌】

外題・「享保八年御有掛入／御祝儀於小御所／舞樂御覽構図」四周双边刷題簽に墨書（一八・八糎×三・四糎）

表紙・改装金茶色表紙（二二・〇糎×一五・二糎）

大きさ・四四・〇糎×六〇・〇糎

印記・なし

#### 【写年・書写者】

本書は奥書を持たないため、写年・書写者ともに不明。少なくとも享保八年の舞樂のあとに記録されたものであると思われる。

【一六三】舞樂図 文政一一年刊 一冊

内務省旧蔵 「請求番号一九九・〇二二六」

本書は、文政六年に成稿した舞樂の左方の図版集で、主に古画の模写。

作者は主に江戸後期に活動した高島千春。一卷一冊。多色刷。

本書は有職故実に通じていた高島千春の手によるものであるが、本書が刊行された文政一一年に没したため、左方のみが刊行されることになった。のち、明治一八年に北爪有郷によって右方が製作・刊行、さらに明治三八年に高橋松亭によって面二五図が加えられて、完成に至った。

自序・凡例・目録ののち、每半葉に一図ずつ配されている。すべて多色刷。画面右肩に曲名。刷の状態、色彩などはかなり良好。

高島千春は大坂に生まれ、のち京都錦小路高倉西に住し、文政頃江戸本所に移った。大和絵師であつたが、有職故実の知識に秀でた人物で、残した作品もそうした図版資料が多い。古画の臨写が特に数多く見受けられる。本書の成稿の前後には、『求古図譜文書類』（文政五年）、『古図類從調度部文書類』（文政六年刊）などが成っている。安政六年に八〇歳で没し、江戸下谷願寿寺に葬られた。（二説には、八三歳）。

なお、本書は内務省の旧蔵。それ以前の所蔵者は不明。

#### 【書誌】

外題・「舞樂図 左」左肩四周单边刷題簽（一七・二糎×四・〇糎）

内題・「舞樂図」

表紙・原裝砥粉色地朱色唐花雲母刷表紙（二七・五糎×一九・〇糎）

墨付丁数・二三丁

挿絵枚数・三九図

匡郭・なし

印記・「大日本帝国図書印」「日本政府図書」

【刊年・刊行者】

本書二・三ウに記載の刊記には以下のようにある。

「以上三九回左方舞／文政六年癸未十一月融齋源千春画／文政十一年戊子五月着色／御書物師 出雲寺富五郎」

本書の自序（一オ～二ウ）にも、文政六年の年記があることから、文政六年に成ったものをのちの同十一年に出雲寺富五郎によって出版されたことがわかる。

出雲寺富五郎は、御用御書物師を務めた出雲寺和泉掾の同族で、江戸の書肆。天保三年の『琉球国史略』の版元である。「諸問屋再興調」によれば、それまで富五郎は霊岸島川口町の町年寄でもあったが、本書出版の同じ年に出雲寺勇三郎から書物問屋株を譲られている。この株は富五郎の先々代にあたる浅草の松栢堂出雲寺要人から、その子の勇三郎に譲られていたが、勇三郎の病気をきっかけに富五郎に譲られたらしい。

【一六四】舞の本 明暦二年刊 二五冊

内務省旧蔵 「請求番号二〇四・〇〇一八」

「舞の本」とは、室町時代の芸能であった幸若舞曲の台本を、読み物に転用したテキストの総称である。これらの本は写本として書き継がれてきたが、江戸時代に入ろうというところに、揃い物の絵本として出版された。

基本的にはその嚆矢に当たる慶長古活字版の本文を元として、絵を添えて寛永整版などが製作された。現存する曲目は五〇番余りにのぼるが、寛永期の時点で出版されたものは全部で三六番三六冊の揃い物であった。本

書はそののち、やや時代の下の明暦二年に刊行されたもので、旧刻の版に新たに刊記を添えなおして出版した再版に当たる。全二五番二五冊。比較的人気が高く、何度も再刻されたような曲目が採用されている。

作者は未詳。『平家物語』や『曾我物語』など軍記物に多く典拠を取る。幸若舞曲そのものが武家の式楽であったことから武骨な内容を持つものが多い。成立年代も曲によってまちまちであると考えられる。

絵師についても未詳である。慶長古活字版が絵を添えた最初のものになるが、これらを元に同じ構図で新刻、乃至、そのまま転用したケースも見られ、またその他の王朝物語や御伽草子の絵入り版から流用して再版したケースも存在する。揃い物であってもこれらの特徴が顕著で、新刻の場合においても、曲によって絵師が異なっていることも多い。あくまでも版元の作業上の都合で、絵が整えられたことが想像される。

また本書に匡郭はない。挿絵の匡郭もまた、本文が入り込んでいる場合などがあった、大きさや形は頁毎にかなり不規則である。

多くがその版元さえ定かではないが、本書に関しては刊記に刊年・刊行者の明記がある。

なお、全二五冊の曲目は以下の通り。

- (ア) 「まんちう」（満仲）
- (イ) 「しだ」（信田）
- (ウ) 「十番切」
- (エ) 「とかし」（富樫）
- (オ) 「おひさかし」（笈搜し）
- (カ) 「たかだち」（高館）
- (キ) 「あつもり」（敦盛）
- (ク) 「景清」

- (ケ) 「ゑほしおり」(「烏帽子折」)
- (コ) 「やしま」(「八島」)
- (サ) 「つきしま」(「築島」)
- (シ) 「しんきよく」(「新曲」)
- (ス) 「わたさかもり」(「和田酒盛」)
- (セ) 「げんぶく曾我」(「元服曾我」)
- (ソ) 「小袖曾我」
- (タ) 「四国落」
- (チ) 「ときわ問答」(「常盤問答」)
- (ツ) 「伊ふき」(「伊吹」)
- (テ) 「いわうかしま」(「硫黄ヶ島」)
- (ト) 「馬そろゑ」(「馬揃」)
- (ナ) 「未来記」
- (ニ) 「木曾願書」
- (ヌ) 「なすのよ」(「那須与一」)
- (ネ) 「はまいて」(「浜出」)
- (ノ) 「いるか」(「入鹿」)

なお、内閣文庫には、本書の他に、江戸初期に書写されたと思われる三冊の「舞の本」も所蔵されており、一部曲目が異なっている。ただし、挿絵は添えられていない。和学講談所の旧蔵である。(請求番号二〇四・〇二一〇)

本書の旧蔵者は内務省。明治に入ってから購入して新収された。それ以前の旧蔵者に関しては不明であるが「松田／本生」の印が見え、これが旧蔵者の蔵書印であると思われる。大英図書館が所蔵している延宝元年版『七十一番職人歌合』に同じ印がある。

【書誌】

- (ア) 「まんちう」(「満仲」)
  - 外題・「まんちう」 中央打付墨書
  - 内題・「まんちう」
  - 表紙・改装萌黄色表紙(二七・五糎×一七・五糎)(裏表紙は紺色表紙で補修)
  - 墨付丁数・四二丁
  - 挿絵枚数・一一図
  - 匡郭・なし(挿絵匡郭は不規則)
- 印記・「大日本帝国図書印」「日本政府図書」「内閣文庫」「松田本生」
- (イ) 「しだ」(「信田」)
  - 外題・「志田」 中央刷題簽一部欠
  - 内題・「した」
  - 表紙・改装萌黄色表紙(二七・五糎×一七・五糎)
  - 墨付丁数・五九丁
  - 挿絵枚数・一五図
  - 匡郭・なし(挿絵匡郭は不規則)
- 印記・「大日本帝国図書印」「日本政府図書」「内閣文庫」「松田本生」
- (ウ) 「十番切」
  - 外題・「十番切」 中央刷題簽(一五・二糎×三・〇糎)
  - 内題・「十番切」
  - 表紙・改装萌黄色表紙(二七・五糎×一七・五糎)
  - 墨付丁数・三〇丁
  - 挿絵枚数・一〇図
  - 匡郭・なし(挿絵匡郭は不規則)

印記・「大日本帝国図書印」「日本政府図書」「内閣文庫」「松田本生」

(エ)「とかし」(「富樫」)

外題・「とかし」中央刷題簽(一五・三糎×三・〇糎)

内題・「とかし」

表紙・改装萌黄色表紙(二七・五糎×一七・五糎)

墨付丁数・二三四

挿絵枚数・六図

匡郭・なし(挿絵匡郭は不規則)

印記・「大日本帝国図書印」「日本政府図書」「内閣文庫」「松田本生」

(オ)「おひさかし」(「笈搜し」)

外題・「おひさかし」中央墨書打付

内題・「おひさかし」

表紙・改装萌黄色表紙(二七・五糎×一七・五糎)

墨付丁数・二五丁

挿絵枚数・七図

匡郭・なし(挿絵匡郭は不規則)

印記・「大日本帝国図書印」「日本政府図書」「内閣文庫」「松田本生」

(カ)「たかだち」(「高館」)

外題・「高たち 上下」中央刷題簽(一五・三糎×三・〇糎)

内題・「たかだち 上」「たかだち 下」

表紙・改装萌黄色表紙(二七・五糎×一七・五糎)(裏表紙は紺色表

紙で補修)

墨付丁数・四九丁

挿絵枚数・一五図

匡郭・なし(挿絵匡郭は不規則)

印記・「大日本帝国図書印」「日本政府図書」「内閣文庫」「松田本生」

(キ)「あつもり」(「敦盛」)

外題・「あつもり」中央刷題簽(一五・三糎×三・〇糎)

内題・「あつもり」

表紙・改装萌黄色表紙(二七・五糎×一七・五糎)

墨付丁数・三三八丁

挿絵枚数・一二図

匡郭・なし(挿絵匡郭は不規則)

印記・「大日本帝国図書印」「日本政府図書」「内閣文庫」「松田本生」

(ク)「景清」

外題・「かけ清 上下」中央刷題簽(一五・三糎×三・〇糎)

内題・「かけ清」

表紙・改装萌黄色表紙(二七・五糎×一七・五糎)(裏表紙は紺色表

紙で補修)

墨付丁数・五五丁

挿絵枚数・一五図

匡郭・なし(挿絵匡郭は不規則)

印記・「大日本帝国図書印」「日本政府図書」「内閣文庫」「松田本生」

備考・五六才に刊記あり。明暦二丙申冬／書林／中野氏道也新刊

(四周双辺枠一八・五糎×七・八糎)

(ケ)「ゑほしおり」(「烏帽子折」)

外題・「えほし折 上下」中央藍色雲紙題簽に墨書(一五・三糎×二・

五糎)

内題・「ゑほしおり 上」「ゑほしおり 下」

表紙・改装萌黄色表紙(二七・五糎×一七・五糎)

墨付丁数・五〇丁

挿絵枚数・一三〇

匡郭・なし(挿絵匡郭は不規則)

印記・「大日本帝国図書印」「日本政府図書」「内閣文庫」「松田本生」

(コ)「やしま」(「八島」)

外題・「やしま 上下」中央藍色雲紙題簽に墨書(一五・三糶×二・

五糶)

内題・「やしま 上」「やしま 下」

表紙・萌黄色表紙に紺色布目型押表紙で一部補修(二七・五糶×一

七・五糶)

墨付丁数・四一丁

挿絵枚数・一三〇

匡郭・なし(挿絵匡郭は不規則)

印記・「大日本帝国図書印」「日本政府図書」「内閣文庫」「松田本生」

(サ)「つきしま」(「築島」)

外題・「つき嶋」中央刷題簽(二五・三糶×二・五糶 一部欠)

内題・「つきしま」

表紙・改装萌黄色表紙(二七・五糶×一七・五糶)

墨付丁数・四七丁

挿絵枚数・一二〇

匡郭・なし(挿絵匡郭は不規則)

印記・「大日本帝国図書印」「日本政府図書」「内閣文庫」「松田本生」

(シ)「しんきよく」(「新曲」)

外題・題簽欠

内題・「しんきよく」

表紙・改装萌黄色表紙(二七・五糶×一七・五糶)(裏表紙は紺色表紙で補修)

墨付丁数・三七丁

挿絵枚数・一一〇

匡郭・なし(挿絵匡郭は不規則)

印記・「大日本帝国図書印」「日本政府図書」「内閣文庫」「松田本生」

(ス)「わたさかもり」(「和田酒盛」)

外題・「和田さか盛」中央刷題簽(一五・三糶×二・七糶)

内題・「わたさかもり」

表紙・改装萌黄色表紙(二七・五糶×一七・五糶)

墨付丁数・三五丁

挿絵枚数・一〇〇

匡郭・なし(挿絵匡郭は不規則)

印記・「大日本帝国図書印」「日本政府図書」「内閣文庫」「松田本生」

備考・表紙右上に副題簽あり。「古今草紙 廿五番揃/全廿五卷」(一

二・二糶×三・五糶)無地料紙に墨書。

(セ)「げんぷく曾我」(「元服曾我」)

外題・「元服ぞか」中央刷題簽(一五・三糶×二・七糶)

内題・「げんぷく曾我」

表紙・改装萌黄色表紙(二七・五糶×一七・五糶)

墨付丁数・一七丁

挿絵枚数・六〇

匡郭・なし(挿絵匡郭は不規則)

印記・「大日本帝国図書印」「日本政府図書」「内閣文庫」「松田本生」

(ソ)「小袖曾我」



外題・「小袖曾我」中央藍色雲紙題簽に墨書（一五・二糶×二・五糶）  
内題・「小袖曾我」

表紙・改装萌黄色表紙（二七・五糶×一七・五糶）

墨付丁数・二四丁

挿絵枚数・七図

匡郭・なし（挿絵匡郭は不規則）

印記・「大日本帝国図書印」「日本政府図書」「内閣文庫」「松田本生」

(夕)「四国落」

外題・「四こく落」中央刷題簽（一五・二糶×二・七糶）

内題・「四国落」

表紙・改装萌黄色表紙（二七・五糶×一七・五糶）

墨付丁数・一六丁

挿絵枚数・六図

匡郭・なし（挿絵匡郭は不規則）

印記・「大日本帝国図書印」「日本政府図書」「内閣文庫」「松田本生」

(子)「ときわ問答」〔常盤問答〕

外題・「常盤問答」中央刷題簽（一五・二糶×二・七糶）

内題・「ときわ問答」

表紙・改装萌黄色表紙（二七・五糶×一七・五糶）

墨付丁数・一五丁

挿絵枚数・六図

匡郭・なし（挿絵匡郭は不規則）

印記・「大日本帝国図書印」「日本政府図書」「内閣文庫」「松田本生」

(ツ)「伊ふき」〔伊吹〕

外題・「いふき」中央刷題簽（一五・二糶×二・七糶）

内題・「伊ふき」

表紙・改装萌黄色表紙（二七・五糶×一七・五糶）

墨付丁数・二三丁

挿絵枚数・八図

匡郭・なし（挿絵匡郭は不規則）

印記・「大日本帝国図書印」「日本政府図書」「内閣文庫」「松田本生」

(テ)「いわうかしま」〔硫黄ヶ島〕

外題・「いわうか嶋」中央刷題簽（一五・二糶×二・七糶）

内題・「いわうかしま」

表紙・改装萌黄色表紙（二七・五糶×一七・五糶）

墨付丁数・一二丁

挿絵枚数・五図

匡郭・なし（挿絵匡郭は不規則）

印記・「大日本帝国図書印」「日本政府図書」「内閣文庫」「松田本生」

(ト)「馬そろゑ」〔馬揃〕

外題・「馬そろへ」中央刷題簽（一五・二糶×二・七糶）

内題・「馬そろゑ」

墨付丁数・一〇丁

挿絵枚数・四図

匡郭・なし（挿絵匡郭は不規則）

印記・「大日本帝国図書印」「日本政府図書」「内閣文庫」「松田本生」

(ナ)「未来記」

外題・「未来記」中央打付墨書（一部欠）

内題・「未来記」

表紙・改装萌黄色表紙（二七・五糶×一七・五糶）（裏表紙は紺色表

紙で補修)

墨付丁数・一二丁

挿絵枚数・五図

匡郭・なし(挿絵匡郭は不規則)

印記・「大日本帝国図書印」「日本政府図書」「内閣文庫」「松田本生」

(三)「木曾願書」

外題・「木曾願書」中央刷題簽(一五・二糎×二・五糎)

内題・「木曾願書」

表紙・改装萌黄色表紙(二七・五糎×一七・五糎)

墨付丁数・八丁

挿絵枚数・四図

匡郭・なし(挿絵匡郭は不規則)

印記・「大日本帝国図書印」「日本政府図書」「内閣文庫」「松田本生」

(又)「なすのよ」(「那須与一」)

外題・「なすのよ」中央刷題簽(一五・二糎×二・五糎)

内題・「なすのよ」

表紙・改装萌黄色表紙(二七・五糎×一七・五糎)

墨付丁数・一一丁

挿絵枚数・五図

匡郭・なし(挿絵匡郭は不規則)

印記・「大日本帝国図書印」「日本政府図書」「内閣文庫」「松田本生」

(ネ)「はまいて」(「浜出」)

外題・「はまいて」中央藍色雲紙題簽に墨書(一五・二糎×二・五糎)

内題・「はまいて」

表紙・改装萌黄色表紙(二七・五糎×一七・五糎)

(ノ)「いるか」(「入鹿」)

外題・「いるか」中央藍色雲紙題簽に墨書(一五・二糎×二・七糎)

内題・「いるか」

表紙・改装萌黄色表紙(二七・五糎×一七・五糎)

墨付丁数・二〇丁

挿絵枚数・六図

【刊年・刊行者】

刊年は明暦二年。版元は中野道也。第八冊目の「景清」の末尾(五六才)に刊記が記載されている。四周双辺の長方枠(一八・五糎×七・八糎)内に以下の通り。

「明暦二丙申仲冬／書林／中野氏道也新刊」

本書は二五番の揃い物であると考えられ、出版当時の冊次順では、この「景清」が最後だったと思われる。また、旧蔵者の手によるものと思われる副題簽があることから、第一三冊目の「和田酒盛」が第一冊目に数えられていたようである。

本書は寛永整版の再版に当たるもの。他にも寛文元年版や、刊年不明版などのものが現存するが、いずれにせよ二五番二五冊が揃う本書は貴重である。

版元の中野道也は、京の書肆で中野小左衛門とも。号に豊興堂、藤屋、中道舎など。もとは京三条通寺町西入にあったが、のち寺町通五条上ルに移っている。初代道也は、同じく京で書肆を営んでいた中野市右衛門道伴の実弟にあたる。

貞享二年版『京羽二重』には真言書とあり、真言宗関連の本を多く扱っていたようである。元禄五年版『萬買物調方記』には経師屋としての記載

がある。

【一六五】多田須河原猿楽記 明治一五年写 一冊

修史館旧蔵「請求番号一九九・〇一九五」

本書は前田尊経閣文庫の所蔵である『多田須河原猿楽記』を、太政官修史館時代に書写して同館に収めたもの。『朝倉亭御成記』と合冊して一冊。

『多田須河原猿楽記』にはまず、「永享五年糺河原勸進猿楽棧敷次第」と呼ばれる、永享五年に行われた勸進猿楽の棧敷次第が載る。当時の將軍は足利義教にあたり、祇園卒塔婆造替のための勸進として行われた。舞台となった糺河原は、賀茂川と高野川が交差するあたりのことである。このときの棧敷奉行は管領細川持之。棧敷次第には青蓮院・梶井兩門跡を筆頭に、室町幕府を支えた錚々たる名前が連なっており、貴重な資料となっている。本書においては、元の写本の形態を朱線で示し、虫食い部分も再現して写してある。

また第四丁目が袋になっており、中に寛正五年の勸進猿楽の絵図が入っている。大きさは四〇・〇糺×六五・〇糺で、折りたたまれている状態。

寛正五年の糺河原勸進猿楽は、鞍馬寺再修のために行われたもので、勸進聖は法印善盛。『大乘院寺社雜事記』によれば「青松院僧都春盛」当時の將軍の足利義政の命によって、音阿弥とその子の觀世大夫又三郎政盛が行った。『蔭涼軒日録』によれば、この勸進猿楽は前述の永享五年の勸進猿楽に倣い、能の番数まで一致させて行われたという。

本書の絵図は、中央に能舞台の図を配し、周囲に上演曲目・演者名を記

載。さらには、將軍の通行順路や、御伴衆、御相伴衆などの詳細な記録が載せられており、当時の勸進能の詳細が克明に記録された貴重な資料であるといえる。

そもその筆者は伊勢宗悟なる人物とされるが未詳。成立年代も不明。

#### 【書誌】

外題・「多田須河原猿楽記／朝倉義景亭御成記 全」四周双辺刷題簽に墨

書（一八・三糺×三・〇糺）

内題・「多田須河原猿楽記」

表紙・原装丁子引表紙（二六・五糺×一八・七糺）

墨付丁数・一八丁

挿絵枚数・第四丁に絵図一幅添付

匡郭・なし

印記・「修史館図書印」「日本政府図書」（蔵書表）

#### 【写年・書写者】

本書に関しては、太政官の写字生が書写したもので、奥書に次の通りある。

「明治十五年四月十日華族前田利嗣蔵書ヲ写ス／二級写字生前園昇／同年五月十六日 五等掌記 瀧澤規道（印）」（五才）

また六才からは、永禄十一年に朝倉義景が自身の館で時の將軍である足利義昭を饗応した『朝倉亭御成記』が所収されている。こちらもまた、前記の『多田須河原猿楽記』同様、修史館時代に書写されたもので、写字生による奥書が残る。

「明治十五年三月七日家族前田利嗣蔵書ヲ写ス／一級写字生 服部為雪／

同年六月十日 五等掌記 瀧澤規道（印）（一八才）

当時行われていた修史事業の一環として書写されたものであると考えられる。

【一六六】謡曲画誌 享保二〇年刊 一〇冊

内務省旧蔵「請求番号一九九・〇〇三二」

本書は享保二〇年に出版された謡曲に関する絵入り本で、謡曲を読み物用として物語に仕立て直した上、それに挿絵を添えたもの。一〇冊。初版は享保一七年で、本書はその再版。享保一七年当時の自序を載せる。改題本に『謡訓蒙図会』（享和二年版）。

作者は中村三近子。三近堂・網錦斎とも号す。京都の人で山崎闇斎に学んだのち、一時期は尾張藩に仕えたが、その生涯のほとんどを町学者として送っている。膨大な量の著作があり、多くは啓蒙教訓書である。節用集、調方記、随想など、様々な形態の著作を残したが、中でも本書は絵師との共著にあたる教訓絵本とされるジャンルである。本書の外には元文四年版『絵本池の心』などがある。いずれの著作も版を重ね、広く流布したといわれている。寛保元年に七一歳で没した。

絵師は橘守国。大坂の人で、狩野探山に学んだ絵師である。狩野派はもちろん土佐派の古画を多く模写し、粉本を数多く残している。また絵手本・画譜なども多く手掛け、出版された絵本の数は数えきれないほどに及ぶ。

そのためか、真偽は不明ながらも『絵本故事談』を刊行した際には、狩野派の画法を世に暴露したとして破門されたという逸話も残されている。寛

延元年に七〇歳で没。

本来、謡曲の詞章を記した謡本は、稽古用の台本としての性格が強く、読み物として用いられることはほとんどなかった。しかし、本書はそれに挿絵を添えて、読み物として仕立て直したという点で、画期的な出版物となったといえる。各巻に五番ずつ、合わせて五〇番を収録する。それぞれの曲目は以下の通り。

- ① 「高砂」「田村」「熊野」「放下僧」「鶉飼」
- ② 「難波」「兼平」「千手」「鉄輪」「舟弁慶」
- ③ 「老松」「頼政」「井筒」「鉢木」「国栖」
- ④ 「養老」「実盛」「絃上」「紅葉狩」「遊行柳」
- ⑤ 「加茂」「鞍馬天狗」「松風」「西行桜」「張良」
- ⑥ 「竹生嶋」「知章」「采女」「木賊」「源氏供養」
- ⑦ 「和布刈」「綱」「楊貴妃」「女郎花」「阿漕」
- ⑧ 「山姥」「大仏供養」「江口」「錦木」「雲林院」
- ⑨ 「玉井」「俊寛」「軒端梅」「草紙洗小町」「藤戸」
- ⑩ 「邯鄲」「七騎落」「杜若」「三井寺」「融」

これらは五番仕立ての番組を装ったもの。

第一冊目の冒頭（六ウ・七オ）と、第一〇冊目の末尾（一八才）は、能舞台と役者の姿を描いたものだが、その他の挿絵は各曲の内容に沿った構図になっている。

各冊に飛び丁があるため、丁付は正確ではない。

なお、本書は明治一二年に内務省が購入したもの。

#### 【書誌】

外題・「謡曲画誌 一（〜十）」四周双辺刷題簽（一六・〇糎×三・六糎）

内題・「謡曲画誌」

表紙・改装鉄色表紙(二二・五糎×一六・〇糎)

墨付丁数・①二四丁、②一七丁、③一八丁、④一七丁、⑤一九丁、⑥一八丁、⑦一八丁、⑧一七丁、⑨一九丁、⑩二二丁

挿絵枚数・①二二図、②二〇図、③二〇図、④二〇図、⑤二〇図、⑥二一図、⑦二〇図、⑧二〇図、⑨二〇図、⑩二二図

匡郭・四周单边(一八・〇糎×一三・五糎)

印記・「大日本帝国図書印」「明治十二年購求」「日本政府図書」

#### 【刊年・刊行者】

享保一七年の初版当時の奥書としては、一八ウに中村三近子の名がみられ、また一九ウに「画工 橘守国」、「彫刻 大坂 藤村善右衛門／同 村上源右衛門」と、絵師の橘守国に加えて刻工の記載もある。このあとの二〇才以降は、享保二〇年版から新たに付け加えられたものと思われる。二〇才〜二〇ウは、京の書肆である伊勢屋正三郎の蔵版目録。二一才には以下の通りある。

「右此本者以觀世左近太夫／正本考之而撰画図文義者也／享保二十年乙卯年正月吉日／京師書林 二鳩堂 今井喜兵衛／額田正三郎／井上忠兵衛／中野宗左衛門／今井七郎兵衛／梅村三郎兵衛／田中庄兵衛」

これによれば享保二〇年版は京の書肆による相合版である。額田正三郎は、蔵版目録を載せる伊勢屋正三郎のこと。今井喜兵衛は同じく京の菊屋喜兵衛。

【一六七】風流仕形舞 宝永三年刊 一冊

和学講談所旧蔵「請求番号一九九・〇二〇三二

本書は宝永三年の年記を持つ浮世草子である。出版当初は五卷五冊であったが、本書は合冊されて一冊。同版本と思われるものが国会図書館に所蔵されているが、巻二が欠けている。

秋月兵庫守長利なる人物の家来である太郎冠者信次が主人公で、太郎冠者による仕方舞(物真似・身振り手振り)によって、都での物語が展開していくという趣向。主君と太郎冠者のやりとりは狂言を模したもので、他にも手妻人形などの様々な芸能の趣向を取り込んだ読み物である。目録には次の通り。

「卷之一／都廻／手づま人形／大名の物まね／附タリ儀理はすてゝも命が物たね／并リ舞たりや太郎冠者。とのさまの／機嫌なをし。是が世界の金袋」

「卷之二／七夕祭／ゆび人形／女方の物まね／附タリ目玉はすてゝも命が物たね／并リたてたりや一本計。継母の／機嫌なをし。是が家老の知恵袋」

「卷之三／花軍／糸あやつり／若衆方の物まね／附タリ鐘はすてゝも命が物たね／并リ生たりや菊の花桶。お姫さまの機嫌なをし。是がなさけのとのゑふくる」

「卷之四／舟いこん／水からくり／敵役の物まね／附タリ武士はすてゝも命が物たね／并リのがれたりや鰐の口。次郎冠者／が機嫌なをし。是が実のかたな袋」

「卷之五／住吉踊／なんきんからくり／花車の物まね／附タリ起請はすてゝも命が物たね／并リうけたりや傾城町。おやかたの／機嫌なをし。

し。／是が栄花の／はななみ袋」

作者・絵師ともに未詳。刊記に版元名の記載もないため、出版の経緯も定かではない。毎半葉九行。

なお、本書は和学講談所の旧蔵である。

#### 【書誌】

外題・「風流仕形舞」左肩打付墨書

内題・「風流仕形舞」

表紙・改装香色布目型押表紙（二二・〇糎×一五・八糎）

墨付丁数・五一丁

挿絵枚数・一六図

匡郭・四周单边（一八・〇糎×一二・七糎）

印記・「和学講談所」「書籍館印」「浅草文庫」「内閣文庫」「日本政府図書」

#### 【刊年・刊行者】

五一ウの本文末尾に次の通りある。

「宝永三丙戌年 初春吉旦」

刊行者は不明。同一の年記が序文末尾にも載る。

#### 【一六八】〔能面之図〕

嘉永四年写 二冊

内務省旧蔵「請求番号一九九・〇二二」

本書は嘉永四年に書写された能面図で、国会図書館に一冊、法政大学能

楽研究所に葩雪の書写による一冊本が所蔵されている。本書は乾坤二冊。奥書によれば本書の元となった本は、奥医師の堀本一甫の所蔵であったらしい。

本書には手彩色で計九〇の能面の図が描かれている。一丁のオモテに面の表、ウラに面の裏側が配され、裏面の作者の落款なども写されている。画面右下に面の作者に関する注が墨書されている。乾坤に四五図ずつ配されており、乾卷の冒頭（一オ〜三オ）に目録が載せられている。

なお、本書は明治一三年に購入されて内務省の所蔵となった。

#### 【書誌】

外題・「能面之図 乾（坤）」左肩砥粉色布目型押金砂子料紙題簽に墨書

（二〇・三糎×三・三糎）

内題・なし

表紙・改装香色表紙（二七・五糎×二〇・〇糎）

墨付丁数・①四七丁、②四七丁

挿絵枚数・①九〇図、②九〇図

匡郭・なし

印記・「飯塚蔵書」「大日本帝国図書印」「日本政府図書」「明治十三年購求」不明印記（長方陽刻印二・八糎×二・〇糎）

備考・表紙右肩に不明印記あり。

#### 【写年・書写者】

②四七ウには次のような奥書がある。

「此能面図或人秘蔵之本也天野藩／渡辺儀右衛門より頼借写之由我藩渡辺／金右衛門長年所持を再借而嘉永／四辛亥冬写畢飯塚直温／此元本は官医

堀本一甫様御蔵本の由」

これによれば本書は嘉永四年に、飯塚直温によって書写された。書写者の蔵書印とおぼしき「飯塚蔵書」の印が乾坤巻共に押されている。

【一六九】金吹方之図 文政九年写 一冊・二軸

旧蔵者不明「請求番号一八三・〇八四五」

本書は絵巻二軸と「訳書」一冊で構成されるもので、現在の造幣局に相当する金座の様子を描いた貴重な資料である。絵巻はそれぞれ上巻二六図、下巻二九図、計五五図が収載。すべて手彩色で、画面上部に場面を示す番号と標題の書かれた付箋が貼付されている。順序は以下の通りである。

(上巻)「第一 後藤三右衛門役宅之図」↓「第二 御勘定方御見廻り之図」↓「第六 使者之間之図」↓「第七 引替所之図」↓「第十二 金改之図」↓「卷十三 吹元金を渡す図」↓「第二十八 金之鋼気を改める図」↓「第二十九 延金附口成り金之図」↓「第九 後藤三右衛門役人詰所之図」↓「第四十 小判・分判等極印打之図」↓「第四十三 小判・分判色改之図」↓「第四十四 吹立出来金目方再吟味之図」↓「第四十五 包立箱詰之図」↓「第八 御勘定方御詰所之図」↓「第十一 御見廻り之図」↓「第十 金座人詰所之図」↓「第四十二 色附出来金下改之図」↓「第二十五 差銀掛改之図」↓「第二十三 判合勘定之図」↓「第十四 諸山吹金等之位を定める図」↓「第三十六 金座人驗極印之図」↓「第三十一 中揉之図」↓「第三十 荒切之図」↓「第三十二 金座より小判・分判吹屋へ渡す由」↓「第三十七 真揉之図」↓「第五

十四 金座・吹屋金吹職人共、御用済み帰りの節改めを請る図」

(下巻)「第五十五 鎮守杜之図」↓「第四 鑑札改め之図」↓「第五 金銀之箱運び出し候図」↓「第四十一 吹立出来色附之図」↓「第三十九 式分判・老分判・老朱判等形を造る図」↓「第二十七 棹金を打ち延す図」↓「第五十一 卸吹之図」↓「第四十八 巧盤を製する図」↓「第十五 碎金之図」↓「第十六 焼金之図」↓「第十七 焼金仕揚之図」↓「第十八 焼金上り寄吹之図」↓「第四十九 汰り方之図」↓「第二十六 判合吹棹金之図」↓「第二十 花降銀目方掛改之図」↓「第十九 灰吹銀を花降銀ニ吹き揚候図」↓「第二十二 留吹銀吹揚之図」↓「第二十一 花降銀目利之図」↓「第三十三 荒切打延之図」↓「第四十六 小判瑕直しの図」↓「第三十四 小判之両面平らかにする図」↓「第三十八 小判槌目打之図」↓「第三十五 吹屋棟梁験極印之図」↓「第二十四 老朱金位組合之図」↓「第四十七 老朱金八十盤を以て計る図」↓「卷五十三 御金箱運び入れ之図」↓「第三 御用蔵之図」↓「第五十 金銀の屑物焼碎の図」↓「第五十二 卸吹所烟抜之図」

これら五五図の絵はすべて金座での作業工程を描いたものであるが、必ずしも順番通りには描かれていない。おそらく幕府の機密保持を目的として、意図的に順番を改竄してあると思われる。絵毎に継ぎ目がない点から見て、製作された当初からこのような順番に変えてあったのだろう。これは、添えてある「訳書」に照らし合わせないと、どの図がどの作業工程を描いたものであるか判別することが不可能になっている。

絵師は幕府御用の町絵師であると考えられるが定かではない。絵の筆致を見るに、少なくとも三人の人物が関わっていると思われる。

見返しは上下に金切箱。絵にも金泥が一部利用されており、絵の質はかなり高い。

なお、本書の類本には、日本銀行が所蔵する「金座絵巻」が知られている。収載する絵図は計四三図で、本書よりも少ないため、本書の抄録写本ではないかと考えられている。

本書に関しては、紅葉山文庫・昌平坂学問所・和学講談所のいずれかに所蔵されていたと思われるが、旧蔵を示す印記はなく、「浅草文庫」の印が最も古いものであり、詳しい来歴は不明。

以下、「訳書」と絵巻の書誌をそれぞれ示す。

【書誌】

① 「金吹方之図訳書」

外題・「金吹方之図訳書」 中央四周双辺刷題簽（一六・五糎×五・〇糎）

内題・なし

表紙・改装香色布目型押表紙（二六・二糎×一七・六糎）

墨付丁数・二四丁

字高・二〇・〇糎（每半葉六行）

印記・「日本政府図書」「内閣文庫」「浅草文庫」

② 「金吹方之図」

外題・「金吹方図絵」 金切箔料紙に墨書（一七・三糎×二・五糎）

内題・なし

表紙・金茶色地草花文様（織） 表紙（高さ二七・〇糎）

挿絵枚数・五五図

印記・「日本政府図書」「内閣文庫」「浅草文庫」

備考・挿絵右肩に標題の付箋あり。

【写年・書写者】

「訳書」の奥付（二四ウ）には次のようにある。

「右は文政元寅年より新規式判吹立、同二／卯年より小判・老判吹直、同七申年より新規／老朱判吹立被仰付候、右三ヶ条吹方手続之／図絵、金座人川村理兵衛・久保田吉六・永野次郎吉之／申付模写せしめ二巻となし、此老冊を添、其訳を示す／文政九年丙戌年秋八月」

これによれば本書が成立したのは文政九年のことである。

ここにある川村理兵衛・久保田吉六・永野次郎吉の三名は金座人（年寄役）であり、おそらく「模写」の監督をした立場の役人たちであろう。これによればおそらく幕府勘定所からの命により、御金改役の後藤三右衛門光亨の主導によって内部文書として製作されたものと考えられる。

ただし、絵師については不明。また訳書の書写者についても記載はない。

【一七〇】 金銀山敷内稼仕方之図 寛政一二年写 一軸

内務省旧蔵 「請求番号一八三・〇八五四」

金山銀山の坑道（敷内）の様子を描いた絵巻。一軸。手彩色。図の中にはそれぞれ墨書で解説が付されており、訂正箇所には付箋が貼付されている。人物の役職名・仕事内容・道具名に至るまで詳細な解説がなされている。

描かれているのは、採掘、水替え作業、選別、冶金等の様子で、概ね、採掘から精錬に至るまでの順序通りに並んでいる。

冒頭はまず坑道内の様子である。採掘の様子は勿論、鉱脈を検分する山



師や、掛樋道などで坑道内に溜まった水を流して作業する人々の様子が見受けられる。

この坑道内の様子の次に描かれているのは、釜口（坑道への入り口）の様子で、当木（坑道内で使用する材木）を切り出す様子などがわかる。

続いては鍛冶小屋・立場小屋などが描かれ、ここでは石撰に従事する女性たちの姿が見える。そのあとには番所など役人たちの詰所の様子が描かれており、ここでは、金銀山に出入りする職人や商人たちが多くいたことがわかる。

この後の部分には、金銀山のふもとの町家の様子も描かれている。酒屋や銀山御用の油売りなどが描かれ、坑内で働く人々を相手にした商売が成り立っていたことがわかる。そのあとに磨場や吹分床屋などの様子が描かれ、採掘された金銀が鑑定される様子までが描かれる。

本絵巻に描かれた金銀山は、本絵巻の外題によれば佐渡であると考えられる。佐渡の金銀山の坑内を描いた絵巻は、日本国内外に一〇〇点近く確認されており、度々変わる奉行や役人たちのために、江戸中期頃から坑内や作業の解説用で作られるようになったと指摘されている。本絵巻に関しても、そういった性格を持つものである可能性が高い。

本書は裏打ちがされておらず下絵の状態と思われる。高さは四四・五糎で、絵巻としては大型である。内務省以前の来歴は不明。

奥書によれば、寛政一二年、狩野融川の作を写したものである。

融川は浜町狩野家四代目狩野閑川の子で、寛政四年、父の跡を継いで奥絵師となった。名は寛信、初め友川、のち青梧齋と号する。文化五年に法眼。和歌は橘千蔭に学んでいる。自身の手がけた朝鮮国王への贈朝屏風に對し、老中が金砂子の厚薄に難を示したことに怒り、文化一二年三月一日、下城の途中で切腹したと伝えられており、「腹切り融川」とも称される。

その御用絵師である融川が手掛けたことを考えると、本絵巻の金銀山は、幕府直轄地であり、最も重要な場所でもあった佐渡と考えて問題ないと思われる。

#### 【書誌】

外題・「□（欠字）之図」（打付墨書）、「佐渡金山図」

内題・「金銀山敷内稼仕方之図」

表紙・改装砥粉色表紙

紙高・四四・五糎

印記・「大日本帝国図書印」「内閣文庫」「日本政府図書」

#### 【写年・書写者】

先にも指摘した通り、末尾の奥書に、次の通りある。

「寛政十二年三月／狩野融川法眼書うつす／者也」

落款などの印記は見えず、書写者は不明。

【一七一】 日光山修善雜記 冷泉為景・伏原賢忠校訂 写年不明 一軸

旧蔵者不明 「請求番号一四三・〇七七〇」

徳川家康の三十三回忌に当たる慶安元年に、日光東照宮で行われた法華八講の記録。冷泉為景・伏原賢忠によって編集・校訂された。元来は三卷三冊で、上巻・中巻に法華八講の様子が記録され、下巻に「御八講并神前諸具之図」が描かれることが多い。本資料の場合は、この下巻部分の書写。

手彩色による図が描かれている。高さ二七・〇糎の楮紙による卷子装。裏打はされていない。

冷泉為景は後水尾天皇・後光明天皇の二代に仕えた歌人で、慶長一七年に藤原惺窩の長男として生まれた。正保四年に勅旨によって、叔父の冷泉為将の跡を継ぎ、下冷泉家を再興。正四位下左近衛権中將に至る。家学である和歌のみならず、漢学に通じ、二代の天皇の侍講を務めた。著作は詠草の他、御幸や法華八講の記録が多い。慶安五年に四一歳で自害。

伏原賢忠も同じく後水尾天皇・後光明天皇の二代に仕えた人物で、慶長七年に清原氏の嫡流である舟橋秀賢の次男として生まれた。後水尾天皇のすずめで舟橋家から分家し、東高倉家を興す。のち家名を伏原と改め、歴代の明経博士を輩出した。後光明天皇の侍講を務め、従二位大藏卿に至る。寛文六年に六五歳で没。

『日光山修善雜記』は日光東照宮で行われた法華八講の記録で、参加したこの二人によって編集され、多くの写本が国立国会図書館などに伝来している。当館にも同名の資料が三件所蔵されている。

但し、本資料に関しては前に述べたように、『日光山修善雜記』のうち、絵画資料に相当する下巻部分のみ。一方、当館所蔵の同名資料（請求番号一四三・〇一三四）は下巻部分を欠いており、なおかつ本文の筆跡に本資料と同一のものが見えることから、本来は同時に書写されたものの可能性もある。本資料に印記がない点から見ても、いずれかの段階で上巻・中巻と離れてしまったことが想像される。

金茶色地唐草文様の表紙が付されているが、後補か。縦二七・〇糎、横三七・〇糎・四〇糎程度の楮紙を二二枚継いで、卷子装に仕立ててある。図は合計二〇図。内訳は以下の通り。

①「御八講 初日之図 〇二日」

- ②「御八講 初日行香之図 十三日」
  - ③「御八講 第二日之図 十四日 並 第四日同之 廿二日」
  - ④「五卷日之図 十八日」
  - ⑤「五卷日大行道之図 十八日」
  - ⑥「瑞籬図」「十八日五卷日大行道之時捧物棚図」
  - ⑦「御八講 竟日之図 廿三日」
  - ⑧「几帳図」「御経机図」
  - ⑨「花足図」「御経管図」
  - ⑩「高座図」「前机図」
  - ⑪「礼版図」「文刻図」
  - ⑫「名香囊」
  - ⑬「名香／香合図」
  - ⑭「奉幣使恭向神前之図 十六日」
  - ⑮「御宝塔拝殿図 十七日」
  - ⑯「御宝塔灌戒之図 十七日」
  - ⑰「曼荼羅供之図 十九日」
  - ⑱「大師廟御恭詣之図」
  - ⑲「三摩耶戒之図 廿一日」
  - ⑳「慶安元年四十一諡号 勅使恭向大師廟之図」
- 多くは拝殿や宝塔の見取り図で、講師や公卿がどこに列座したかがわかるように描かれている。また②の図の場合は、行香（焼香の香を配り渡すこと）の動線が描かれている。また⑧⑨⑫は法会に用いられた道具類の図で、併せて寸法も表記されている。

【書誌】

外題・「日光山修善雜記」

内題・なし

表紙・金茶色地唐草文様（織）表紙

料紙・楮紙（高さ二七・〇糎）

字高・なし

挿絵枚数・二〇図

印記・なし

備考・裏打なし、手彩色

【写年・書写者】

本資料の奥書は以下の通り。

「此修善雜記三卷者往年於日光山／被修 勅会之日録也依毘門主懇望／各加管見補遺漏令校訂了尚有兼魯之誤歟／慶安二年秋九月／左中将藤原朝臣為景／主水正清原朝臣賢忠」

これによれば本資料の成立は、法華八講が催されたその翌年の慶安二年であることがわかる。「左中将藤原朝臣為景」「主水正清原朝臣賢忠」はそれぞれ、冷泉為景と伏原賢忠。

但し、この奥書は元奥書で、本資料の写年・書写者に関しては不明。彩色の色合から見て江戸時代後期か。

【一七二】道成寺絵詞 享和二年写 一軸

内務省旧蔵 「請求番号一九二一・〇五五二二

本資料は、酒井家旧蔵「道成寺絵」を、享和二年に屋代弘賢が模写した絵巻。道成寺が所蔵する室町時代成立の『道成寺縁起絵巻』の異本に相当し、天理図書館が所蔵する横型奈良絵本『ひたか川』や根津美術館所蔵の絵巻『賢学草子』と同じ内容を持つ。前半部分の欠落および、末尾に延宝五年の土佐光起の極書がある点など、酒井家旧蔵本を忠実に模写している。但し、弘賢自身の奥書によると、酒井家旧蔵本からの直接の模写ではなく、「或人」から借りた「蔵本」に拠るものだという。高さ二六・四糎の楮紙に手彩色。裏打はされていない。

『道成寺縁起絵巻』では、僧に恋慕した寡婦がその後を追ひ、蛇体となって日高川を渡って、道成寺の鐘の中に隠れた僧を焼き殺すという物語が本筋となっているが、本資料をはじめとする『賢学草子』の系統では、僧の名前を賢学とし、清水寺から物語が始まる構成を取る。

三井寺の僧の賢学は、遠江のある長者の娘と深い因縁で結ばれているという夢告を受け、修行の妨げとなることを怖れて、まだ幼かったその娘の胸を刺して逃げる。やがて時が過ぎ、清水寺で美しい娘に出会った賢学は契りを結ぶが、自分がかつて傷付けた娘であることを悟って怖れのあまりに娘を捨てて逃げ出す。賢学を恋慕う娘は、熊野へと逃れた賢学を追ひ、日高川を渡るうちに蛇体に変身し、ある寺へと賢学を追ひ詰める。賢学は鐘の中に逃げ込むが、蛇体の娘は鐘に絡みつき、鐘を壊して賢学を捕まえると、共に日高川の底へと沈んでいった。

道成寺縁起と比較すると、法華滅罪を説くなどの仏教色が排除され、男女の因果物語に焦点を当てており、より御伽草子的な内容になっていると

指摘される。また、清水寺を舞台とし、賢学が逃げ込む場所も道成寺ではなく「ある寺」とするなど、都風のアレンジが加えられ、同時に日高川により大きな焦点を当てている。また、道成寺縁起では女を寡婦とする一方、本資料では十六歳の姫君に設定しており、謡曲の「道成寺」と共にのちの安珍・清姫伝説に大きな影響を与えたとも指摘される。(臼田甚五郎「日高川草紙をめぐって」『野洲国文学』八号、一九七一年／千野香織「日高川草紙にみる伝統と創造」『金鯰叢書』八号、徳川黎明会、一九八一年)

本資料に関しては、前半部分の娘を刺して逃げる件までを欠いている。これは元となった酒井家旧蔵「道成寺絵」がそもそもこの部分を欠いているため。

絵に関しては、元の資料が小絵(小型の絵巻)であったため、高さ一四・五糎程度の間に収められている(料紙の高さは二六・四糎のため、上下に大きな余白がある)。手彩色で、一部には金泥が用いられており、概ね元の写本を忠実に再現しようとした形跡が見て取れる。屋代弘賢の奥書によれば、この絵を手掛けたのは谷文晁の門弟らだという。表紙は栗皮色料紙が用いられ、外題は打付書で「道成寺絵詞」とある。

詞書は字高一四・二糎に統一されている。また画中詞も見られる。筆跡は屋代弘賢のもの。

屋代弘賢は、天明元年に西丸御台所に出仕して以降、幕府に右筆として仕え、能書家として知られた。国学を塙保己一、漢学を山本北山、和歌を冷泉為村に学び、『群書類従』『藩翰譜続篇』『寛政重修諸系譜』『古今要覧稿』などの編纂に関わった。類書・叢書の編纂校訂に大きな功績があり、本資料もまたそのために収集した資料の一部だったと推察される。『弘賢隨筆』中には「道成寺考」と題した文章が収められており、弘賢が道成寺縁起に関心を持っていたことが窺える。

弘賢が集めた膨大な蔵書は、上野不忍池のほとりに建てられた三棟の書庫に保存され、不忍文庫と称された。奥書によれば、本資料はこの不忍文庫のうちの一点として所蔵されていたもの。(当館所蔵の『不忍文庫改正書目』(請求番号二二九・〇一〇四)には、「中古物語」の部に『道成寺物語』の題が見える。)

弘賢の没後、蔵書のほとんどは蜂須賀家の阿波国文庫に献納されたが、散逸した資料も多く、本資料には「阿波国文庫」の印記が見られないことから、おそらく弘賢が没した段階で流出したと思われる。

本資料の印記は冒頭に「明治十二年購求」「大日本帝国図書印」の二つが見え、また本文中に「内閣文庫」印が三か所捺されている。これらから推察するに、弘賢の没後に流出したものを、政府が明治十二年になって買求めたと思われる。

#### 【書誌】

外題・「道成寺絵詞」(打付墨書)

内題・なし

表紙・栗皮色(織)表紙

料紙・楮紙(高さ二六・四糎)

字高・一四・二糎

印記・「明治十二年購求」「大日本帝国図書印」「内閣文庫」

備考・裏打なし、手彩色

#### 【写年・書写者】

本資料末尾には、元の酒井家旧蔵「道成寺絵」にある土佐光起による極書も書写されている。

「右道成寺之絵一卷者／土佐弾正忠広周真筆／無疑候仍加愚筆証焉而已／延宝五年／仲夏上旬／土佐将監光起」

これによれば、「道成寺絵」は、土佐派の絵師である土佐広周によって描かれたもの。延宝五年に土佐光起が鑑定した。土佐広周は、室町時代中期の土佐派の絵師で、後小松院七回忌法要の本尊を製作して所領を得たことが知られている。しかし、宮廷絵所の絵師であったかどうかは判然とせず、足利義政の盃台絵を描くなどしている点から見て、室町幕府と近い関係にあったと指摘されている。ベルリン東洋美術館が所蔵している『天稚彦草子』が唯一の信頼できる真筆であるとされ、酒井家旧蔵「道成寺絵」も光起の極書の他には広周の筆とするには確証がない。

なお、この極書は、筆跡も元の資料を忠実に再現している。

また、本資料末尾、より軸に近い位置に、屋代弘賢による奥書がある。

「右道成寺絵詞借或人蔵本模之画図者写山楼門弟数人之／手詞者余扶病書之以蔵不忍文庫 享和二年九月廿七日源弘賢」

これによれば、本資料の写年は享和二年。「或人」の「蔵本」を模写した。

絵図は写山楼（谷文晁）の門弟ら複数人の手によるもので、詞書は屋代弘賢の筆。弘賢は谷文晁と共に『集古十種』の編纂に参加しており、門弟らとも親交があったと考えられる。不忍文庫に所蔵するために書写したものである。

【一七三】 積奠図 写年不明 一軸

内務省旧蔵 「請求番号一九〇・〇五六六」

積奠とは孔子をはじめとする儒教における先哲を祀る儀式のことで、本資料はその様子を描いた絵巻。『年中行事絵巻』を部分的に抜粋して模写したもの。手彩色。一軸。

積奠は、儒教における先哲を先聖・先師として祀る儀式で、古代中国を起源に持つが、日本においても大宝年間にはすでに行われていたことが知られている。大学寮の儀式として、二月・八月上旬の丁の日に行うことがすでに『大宝令』に見え、また『延喜式』には、孔子および孔子十哲の画像に酒食を備えて拝礼する「饋享」、儒教古典からテーマに応じて論議する「講論」、参列者による酒宴である「宴座」の三構成を取っていたことが記されている。但し、これらの内容は時代と共に変化し、平安時代末期には儒教の祭礼という性格が薄まって一般的な公家行事となっていた。その後、中世には衰退、断絶が続き、本格的に再興されたのは、近世に入って林家が聖堂で行うようになってからであり、幕府の儒教重視政策も相まって盛大に催されるようになった。新井白石や松平定信の意向による改革も何度かあったが、幕末まで存続、各地の藩校でも催された。

本資料はその積奠の平安時代末期の様子を伝えるものである。先に述べた「饋享」、「講論」、「宴座」の他、これらから分化した「百度座」「隱座」など、平安時代末期に行われるようになった儀式の様子も描かれている。公卿の拝礼の様子、列座の順序、用いられる調度品や供物、建築などが詳細に記録されている。彩色も施されている。

料紙は高さ三六・七糎の楮紙で、幅四七・二糎×五二・〇糎程度の料紙を五枚継いだもの。裏打ちはされていない。表紙は変色が大きい、水浅

葱色の料紙を用いており、打付書の外題の下に、「不忍文庫」の印記が見える。

「不忍文庫」は、前掲資料解題に述べたように、屋代弘賢の蔵書のこと、本資料もまた屋代弘賢の手元にあったものだと想像される。また冒頭部分右下にも同じ「不忍文庫」印が捺されている。

見返しには「明治十二年購求」の印が見え、散逸した不忍文庫の資料を新政府が明治十二年に買い求めたことがわかる。また他に、紙背に「大日本帝国図書印」、本文中に「日本政府図書」の印記がある。

#### 【書誌】

外題・「積奠図」（打付墨書）

内題・なし

表紙・水浅葱色表紙

料紙・楮紙（高さ三六・七糎）

字高・不定

印記・「不忍文庫」「明治十二年購求」「大日本帝国図書印」

備考・裏打なし、手彩色

#### 【写年・書写者】

本資料は奥書を欠くため、写年・書写者ともに不明。直接元となった資料についても不明。彩色の色合から見て、江戸時代後期の書写か。

【一七四】会繡譜 写年不明 一軸

浅草文庫旧蔵 「請求番号一九〇・〇五六七」

清朝の官服における、文様・装飾を身分ごとに分類した服飾資料。絹本。手彩色。内題は柴野栗山の手によるもの。

本資料は大型の卷子装（縦四七・〇糎）で、金茶色地丸龍瑞雲文様（織）の表紙が付けられているが、八双も折れており、状態はかなり悪い。但し、元は絹本に手彩色した資料で豪華な装丁が施されたもの。本文部分は絹本で、清朝の官服における文様・装飾見本分類の上、色も忠実に彩色している。有職故実の資料として製作されたものか。一級の絵師の手によるものと思われる。但し本資料は奥書を欠くため、来歴や写年・書写者についていずれも判然としない。

冒頭部分（四七・〇糎×八〇・〇糎）のみが楮紙で、「会／繡／譜」と揮毫されている。この部分に捺されている朱印は「三近堂」「柴邦彦」「柴彦輔」の三種で、いずれも柴野栗山の印である。

柴野栗山は名を邦彦、字を彦輔とした。栗山、また三近堂は号である。江戸の昌平黌に学んだのち、蜂須賀家の儒臣として世子を養育、その後、寛政の改革の折、幕府に招かれて天明八年に昌平黌教官として学制の改革に尽力した。朱子学振興・寛政異学の禁を建議、推進した。ほぼ同時期に昌平黌に招かれた尾藤二洲、古賀精里と併せて「寛政の三博士（寛政の三助）」と称される。儒臣として活動したが、優れた文章家・詩人・書家としても知られ、著述も多い。

本資料の場合は、求められて揮毫したと考えられる。

【書誌】

外題・なし

内題・「会／繡／譜」

表紙・金茶色地丸龍瑞雲（織） 文様

料紙・楮紙、絹

字高・不定

印記・「日本政府図書」「浅草文庫」「三近堂」「柴邦彦」「柴彦輔」

備考・手彩色、水損あり

【写年・書写者】

本資料は奥書を欠くため、写年・書写者ともに不明。

【一七五】〔舞楽図稿〕

写年不明 四軸

田安德川家旧蔵 「請求番号一九九・〇四五二」

大型の卷子装（高さ三五・〇糎）に仕立てられた舞楽図の下絵。一部手彩色。四軸。絵師は不明。

四軸はそれぞれ表紙に①「春」②「夏」③「秋」④「冬」の打付書がある。表紙の見返しに曲名が出されているが、後補の可能性が高い。②③④に関しては曲目が左右に分けられている。見返しの曲名は以下の通り。

①「振鉾 蘇合香 胡蝶

皇帝破陣楽 進走徳 赤城桃李花

新鳥蘇 万秋楽 皇仁庭

団乱旋 地久 秦王破陣楽

古鳥蘇 万歳楽 狛鉾

春鶯囀 延喜楽 三台塩

退走徳 迦陵頻 曾利古

②「左方 右方

還城楽 納曾利

裏頭楽 敷手

陪臚 新鞞鞞

玉樹後庭花 林歌

春庭花 進曾利古

散手破陣楽 貴徳候

喜春楽 白浜

賀殿 保曾呂久世利

河南浦 胡徳楽

来宮楽 進曾利古

陵王 納曾利

③「左方 右方

賀皇恩 登天楽

胡飲酒 林歌

黄菊承和楽 仁和楽

打毬楽 垣破

北庭楽 崑崙八仙

感城楽 阿夜岐利

宝冠散手 鯉口帰徳

輪台序 敷手

青海破 狛鋒

府装楽 登天楽

五常楽

④「左方 右方

採桑老 新鞅鞆

新傾盃楽 胡徳楽

秋風楽 加利屋須

撥頭 崑崙八仙

按摩 二舞

加利屋須

一鼓

甘州 地久

鶏婁舞 垣破

万歳楽 新曾利古

柳花園 納曾利

安楽曲 右方楽屋

左方楽屋

東遊

本文部分では、絵の右肩に曲目が出されている。①に関しては色変わり料紙に墨書。途中から打付書になる。彩色に関しては一部分のみ。丹緑が基本だが、他に装束の色に合わせて桃色などもある。胡粉での修正箇所も見られる。

料紙は斐楮混ぜ漉きの厚手のもので、幅二七・〇糎前後の料紙を継いで卷子装に仕立ててある。

本書表紙には「猷英楼図書記」の墨印があり、田安德川家の旧蔵であつ

たことがわかる。殊に初代の田安宗武は、荷田在満や賀茂真淵とも交流した国学者で、特に有職故実の研究に関しては多くの著作を残している。

【書誌】

外題・「舞楽図稿 春（夏・秋・冬）」（打付墨書）

内題・なし

表紙・砥粉色横縞（刷）文様

高さ・三四・二糎

印記・「猷英楼図書記」（墨印・表紙）「秘閣図書之章」（朱印・本文冒頭）

「日本政府図書」（蔵書票・①紙背）

備考・厚手の斐楮混ぜ漉き料紙

【写年・書写者】

奥書を欠くため、写年・書写者ともに不明。

【一七六】琉球中山王両使者登城行列 写年不明 二軸

内務省旧蔵 「請求番号一七八・〇六七八」

本資料は、宝永七年に琉球王尚益の使節が江戸城に登城する際の行列を描いたもの。高さ二七・八糎の卷子装で、縹色地菊花唐草文（織）の表紙が付されている。手彩色。二軸。

江戸に向かう琉球使節には、將軍の襲職を祝うための「慶賀使」と、琉球王の即位の御礼のための「謝恩使」の二種があつたが、宝永七年の使節



はこの二種が同時に派遣された珍しい例のひとつ。第六代将軍徳川家宣職と、中山王尚益即位に伴うものであった。本資料の内題が「琉球中山王両使者」となっているのは、そのためである。

こうした使節団は道中、様々な交流をして江戸をめざしたため「江戸のぼり」と称され、街道沿いや琉球に文化的な影響を及ぼしたといわれる。多くは、薩摩・長崎を経て、下関から瀬戸内海を渡って大坂へ向かい、京都を経て東海道を東下するルートが採られた。江戸での滞在は一〜二か月程度で、大坂まで陸路を取り、大坂からは海路で薩摩を経て琉球へと帰参した。

この宝永七年の場合は七月二日に琉球を出発し、翌正徳元年三月二二日に琉球に帰着した。このときの使節は、総勢一六八名、江戸時代で最大規模である。

①上巻には慶賀使の美里王子、謝恩使の豊見城王子、それぞれの副使である富盛親方、与座親方らの使節の一行の様子が描かれている。献上馬や随行した楽童子、「涼傘」と呼ばれる赤い日傘や琉球王朝を表す虎の旗印など、琉球使節に特徴的な様子を見て取ることができる。他にも警固のために随行する薩摩藩士たちの様子も描かれている。

②下巻は、薩摩藩江戸留守居役を先頭に、鹿児島藩家老以下の警備・先導の薩摩藩士の行列が中心に描かれている。末尾には「此外家老一人用人一人留守居一人琉使／登城以前ニ御城江罷昇候」(※「城」「御城」の前は闕字)と注記がある。①上巻に比べて半分ほどの分量で、シミも見られ、やや痛みが多い。

料紙は斐楮混漉紙で、雲母引料紙で裏打してあるため、やや色移りがある。見返しは金砂子だが、②下巻に一部変色が見られる。

本資料は①上巻の巻首部分に朱印があり、それぞれ「大日本帝国図書印」

「日本政府図書」「明治十三年購求」となっており、本資料が明治一三年に購入されたことがわかる。

#### 【書誌】

外題・なし

内題・「宝永七年寅年十一月十八日琉球中山王／両使者登□城行列」(※「城」の前は闕字)

見返し・金砂子(一部変色あり)

表紙・①縹色地菊花唐草文様(織)表紙、②同

高さ・①二七・八糎、②同

印記・「大日本帝国図書印」「日本政府図書」「明治十三年購求」

備考・斐楮混漉料紙、裏打に雲母引

#### 【写年・書写者】

奥書を欠くため、写年・書写者ともに不明。

【一七七】中山王来朝図 写年不明 一軸

内務省旧蔵 「請求番号一七八・〇六八二二

本資料は、琉球使節の、海路の様子を描いたもの。特に護衛の船団の様子が描かれている。手彩色、一軸。

慶長一四年に薩摩藩は琉球王国を降伏させると、琉球王国の薩摩への帰属、ならびに奄美群島の割譲などを決定し、以降、琉球王国は薩摩と明(の

ち清) に対して二重に帰属することになった。また、將軍の襲位の際に慶賀使、新王の即位の際には謝恩使が江戸に派遣されることも慣例となる。

本資料の中には、この慶賀使と謝恩使の船が両方とも描かれている。二者が同時に派遣されたのは寛永十一年、宝永七年、正徳四年の計三回だが、本資料には年記の記載がない。

なお目録書名の「中山王来朝図」は、外題に基づくもの。(四周双边刷題簽に墨書) 中山王が実際に来朝したのは、薩摩藩に帰属することになった慶長一五年に、尚寧王が駿府・江戸に連行された例のみで、画中にこの様子がないことから見て、正しい外題ではないことが推測される。

本資料には後補で、絵の上部に附箋(六・七糎×一・〇糎)が貼っており、朱で注記が施されている。先頭から順に「広島藩」「賀慶正使乗船 山口藩」「恩謝正使乗船 熊本藩」「福岡藩」「小倉藩」とある。

表紙見返しには金銀切箔。高さ二六・〇糎の楮紙に彩色されている。裏は雲母引。表紙の織は栗皮色の地に梅鉢文様に見えるが、かなり状態が悪く擦り切れた状態。

見返しに「明治十五年購求」の朱印が捺されていることから、明治一五年に買い求められたものとわかる。

#### 【書誌】

外題・「中山王来朝図」 四周双边刷題簽(一六・七糎×二・七糎)に墨書

内題・なし

見返し・金銀切箔

表紙・栗皮色地梅鉢文様(織) 表紙

高さ・二六・〇糎

印記・「大日本帝国図書印」「明治十五年購求」「日本政府図書」

備考・楮紙、裏打に雲母引

#### 【写年・書写者】

奥書を欠くため、写年・書写者ともに不明。

#### 【一七八】大和国山陵図 細井知慎 写年不明 一軸

旧蔵者不明 「請求番号二六二一・〇〇五三二

本資料の目録書名は外題に基づき「大和国山陵図」とされているが、本来は細井広沢によって編まれた『諸陵周垣成就記』の附図に相当する。幕府によって元禄一〇年に諸陵の調査・垣設置事業が行われた際に得られた情報がまとめられた。大和国に存在する天皇陵を手彩色図で示し、併せて詳細な地形や寸法などが記されている。卷子装、一軸。

細井広沢は元は京都嵯峨の医者の子に生まれたが、のち坂井伯元・林鳳岡に儒学を学び、博学を以て柳沢吉保の近習となった。名は知慎、通称は次郎太夫。広沢は号のひとつである。特に能書家として知られ、また篆刻家としても著名で朝鮮通信使返翰の印も担当した。元禄十五年に柳沢吉保のもとを致仕してからのち水戸家に仕え、『万葉集』研究に携わった。剣術は堀部安兵衛と同門で、吉良邸討ち入りの折にも協力したとも言われている。書家としての面が有名だが、博学多才で知られ、特に柳沢吉保からは大きな信頼を寄せられていたといわれ、元禄一〇年の天皇陵調査・修復は、細井広沢から柳沢吉保に対して献策されたものとされる。

近世において天皇陵はこの元禄一〇年をきっかけに、享保年間や文久年

間に度々大規模な修築が行われている。

本資料は、まず神武天皇御陵をはじめ、三五図の天皇陵の図が示されている。同時に記録されているのは、陵墓名（「未考」として不明も含む）、所在地、領主名、方角、地理、地形、さらに、社殿のある場合にはその寸法も含む。また改陵についても言及され、石室の内部まで調査に立ち入った場合には、石室の寸法や内部の石棺の寸法や形状も記録されている。

末尾には、大和国以外の河内・和泉・山城などの陵墓の一覧が「陵図脱漏分」として載せられている。原則として歴代の順序に則った掲載で、最後は安永八年に崩御した後桃園院についての記述で終わる。細井広沢は享保二〇年にすでに没している点から見て、後補された記事が多いと推測される。

当館には、本資料のほか、折帖の『諸陵周垣成就記』（写年不明、図のみ一帖。請求番号一四四・〇二四七）、明治二三年に書写された『元禄十一戊寅歳諸陵周垣成就記』（全三冊、請求番号一四四・〇二二二）が所蔵されている。

本資料は縹色表紙の卷子装で、表紙・外題ともに後補と思われる。見返しには金砂子。料紙は楮紙で高さ二七・三糎。見返しに附箋（一七・三糎×五・五糎）が貼付されており、墨書で「此印ハ別押ニシテ文字ハ／秘閣図書之章ト読ムヘシ／蓋シ楓山文庫ノ所蔵ナルヘキ／カ」とある。なおこの附箋には楯円陽刻印「外寄」と押印されており、いずれかの段階で外部で鑑定され、政府によって買い戻されたものと想像される。

#### 【書誌】

外題・「式／百廿一函／□□国山陵図」題簽（七・五糎×三・二糎）に墨書、一部剥離

内題・なし

見返し・金砂子

表紙・縹色表紙

高さ・二七・三糎

印記・「秘閣図書之章」「内閣文庫」

備考・楮紙、手彩色

#### 【写年・書写者】

奥書を欠くため、写年・書写者ともに不明。

#### 【一七九】神武御陵創修図 写年不明 一軸

内務省旧蔵 「請求番号二六一・〇〇五〇」

本資料は、神武天皇陵を調査・修復した際に催された祭祀の様子を描いた図。手彩色、一軸。

『古事記』『日本書紀』の記述によれば、一三七歳で崩御した神武天皇は畝傍山の麓に葬られたという。『延喜式』にもまた神武天皇陵についての記載があるが、中世にはすでに場所を同定することができなくなっていた。前掲資料でも述べた通り、幕府は元禄一〇年以来、度々天皇陵の調査・修復を行っており、この神武天皇陵についても場所の特定が試みられ、元禄の修復の折には畝傍山からはやや離れた「福塚」という円墳が神武天皇陵として定められた。しかし、『古事記』『日本書紀』の記述との矛盾があり、当時から異論が唱えられていた。そして、文久三年の大規模な調査・修復

事業の折に、より『古事記』『日本書紀』の記述に合致する「四条ミサンザイ古墳」が神武天皇陵として大規模修築され、現在に至る。（元禄の修復で神武天皇陵とされた円墳は現在は綏靖天皇陵とされる。）

本資料は、画中に描かれている神武天皇陵が「四條村」に位置している点から見て、「四条ミサンザイ古墳」を描いたものであることがわかる。したがって文久三年の際の神武天皇陵の大規模修築を記録したものであると推定される。

図は俯瞰で描かれており、畝傍山を手前に、三輪山や春日山方面を正面に見る構図。祭祀の様子は小さいながら人物一人一人が精緻に描かれている。画面、奥の香久山方面には、警固の戸田忠至の陣が張られている様子も描かれている。

戸田忠至は宇都宮藩の重臣で、のち下野高德藩初代藩主。宇都宮藩が建白した山陵修補が幕府に採用されるに当たり、山陵奉行に任じられて大きな功績を残した。

画中に「陵奉行」として「戸田大和守」の名が記されている点から見て、本資料が文久三年の修復事業の様子を描いたものとして間違いないと思われる。

本資料は奥書を欠くため、作者は不明。

なお当館が所蔵する多聞櫓文書の中には、「戸田大和守神武天皇御陵江勅使御発遣二付為御用致出立候二付覚書」（多〇四三三四三六）など、当時の神武天皇陵修築に関わった人々の文書が数多く所蔵されており、その規模の大きさをうかがうことができる。

### 【書誌】

外題・「神武御陵創陵図」 打付墨書

内題・なし

表紙・縦刷毛目表紙

高さ・三一・七糎

印記・「大日本帝国図書印」「日本政府図書」

備考・楮紙、手彩色

### 【写年・書写者】

奥書を欠くため、写年・書写者ともに不明。

【一八〇】薩隅日勝景図 文化一二年写 三軸

田安家旧蔵 「請求番号一七六・〇二八七」

本資料は、薩摩・大隅・日向の南九州を中心とした三国の名勝を図にしたもの。手彩色で、「天」「地」「人」の三軸。

奥書によれば、絵師は「雪亭雪挑」という人物。水墨画風の筆致だが、ふんだんに彩色が施されている。当時の薩摩藩領内を克明に描いた貴重な資料のひとつであるといえる。山や川などの景勝地のほか、「苗代川焼物細工之図」などの工芸にまつわる風景も描かれている。それぞれの絵は以下の通り配列されている。

- ①「天」神龜山・新田八幡宮・湯元瀧・冠嶽・苗代川焼物細工之図・花尾山大権現・吉利十二景・与倉泉・金峯山・松ヶ轟・鏡池・池田
- ノ池・水成川・開聞神社・神子轟・上宮獄・紫尾山三所権現・曾木
- ノ瀧・平浦・八艘穴

② 「地」 檳榔島・有明浦・波見浦湊・内之浦湊・御寄山・屋久島・種子島・赤尾木湊・浦田湊・岩屋・宮之浦川・安房川・栗生川・長田川・伊座敷浦・古江浦・江の島・二川・馬牧・蔵王嶽・米山薬師・馬牧

③ 「人」 片浦・野間嶽・大浦潟・吹上濱・久多嶋神社・江口濱・薩摩渡瀬・照島・神龜山・御成川・名護浦・脇本浦・隼人迫門・響石・米之津・龍王岩・大島・唐ノ濱・里村入江

表紙には二・三×一・四×二・〇厘の朱色の付箋が貼られており、上巻から順に「天」「地」「人」と墨書されている。題簽はなく、外題は打付書。

「天」「地」「人」の付箋も後補の可能性がある。

表紙には墨印「猷英樓図書記」が捺されており、田安家の旧蔵であったことがわかる。また表紙の端には、瓢箪型の「蓬枢閣」という朱印と、符丁と思しき番号が墨書されている。本文冒頭には、内務省地理局が用いていた「地誌備用図籍之記」の朱印がある。

「蓬枢閣」は、明治から大正にかけて、日本美術を海外に紹介するなど活動をしていた画商小林文七が設立した出版社（古本錦絵店）のことと思われる。同型の印は未見ながら、「蓬枢閣」の正方形や楕円形の印は多くの書物に残されている。

これらのことを踏まえると、本資料は、田安家から小林文七の手を経て、のち内務省地理局に収蔵されたことが想像される。

#### 【書誌】

外題・「薩隅日勝景図」打付墨書

内題・なし

表紙・藍色横刷毛目表紙

高さ・二六・〇厘

印記・「猷英樓図書記」「蓬枢閣」「地誌備用図籍之記」「日本政府図書」備考・楮紙、手彩色

#### 【写年・書写者】

本資料には、第一軸の末尾と、第二軸の末尾にそれぞれ奥書がある。

① 「右薩隅日名所絵図上巻薩候より御借ニ／成雪亭摹写／文化十二年乙亥十二月」

② 「右薩隅日名所絵図中巻／文化十二年乙亥冬雪亭挑ニ／命して摹写せしむ」

それぞれに「上巻」「中巻」という語が見えることから、第三軸末尾にも「下巻」について記した奥書があったと思われるが、存在しない。

この奥書に拠れば、薩摩藩主所蔵の資料を模写したものだという。文化十二年の時点での藩主は第一〇代の島津斉興。幕末の内憂外患にさらされる中、藩政改革に着手し、特に調所広郷を重用して大胆な財政改革を行ったことで知られる。

【一八一】調布玉川画図 弘化二年刊 一軸

内務省旧蔵 「請求番号一七四・〇三二六」

本資料は、多摩川の水源から河口までの名勝を描いた地誌。序文によれば、関戸（現在の多摩市）の名主であった相沢伴主が、水源探索の際に見た風景を写生し、のちにそれを絵師の長谷川雪堤が浄書したもの。

相沢伴主の父の五流は、御室仁和寺の絵師として多くの文人たちと交流があった。文化六年に大田南畝が多摩川の堤防検分を行った際に、その様子を「玉川勝蹟図」に描かせている。本資料の原型となったのは、この図であると考えられている。

長谷川雪堤は、江戸時代後期から明治にかけて活動した絵師で、父雪旦に学び、名所絵を能くした。本資料のほか、地誌『相中留恩記略』や『成田名所図会』『日光山一覽』の挿絵で知られ、多くの地誌編纂事業・名所図会に関わった。当館所蔵の『声曲類纂』（請求番号一九九・〇二三八、一九九・〇二三九）の挿絵も手掛けている。本資料の図は相沢伴主の求めに応じたもの。伴主は本資料を出版するために無尽講で資金を捻出したという。

本資料は卷子装で一軸。原装と思われる。また当館には、『玉川之弁』（請求番号一七四・〇〇七七）の題で袋綴じの写本も所蔵されている。版本から書写したもの。本資料の彩色は水域を青く染めている程度だが、『玉川之弁』には緑や黄の彩色がされている。

本資料は金茶色菊花文様の織物で装丁され、見返しには栗皮色の料紙が使用されている。経年劣化の程度から見て後補と思われる。

また本資料の高さは三一・〇糎だが、これは裏打ちした料紙の大きさで、元の大きさは三〇・〇糎前後。修復の際に、料紙の劣化がひどかったために、一回り大きい料紙で裏打ちしたと想像される。

「明治十四年購求」の印記から、同年に政府が購入したことがわかる。

#### 【書誌】

外題・「調布玉川惣画図 全」刷題簽（二二一・〇糎×二・五糎）

内題・「調布玉川絵図」

表紙・金茶色菊花文様（織）表紙

高さ・三一・〇糎

印記・「大日本帝国図書印」「日本政府図書」「明治十四年購求」

備考・楮紙、一部彩色

#### 【写年・書写者】

序文によれば弘化二年の出版。序文は相沢伴主の自筆版下と思われる。

#### 【一八二】波丹人図 文政元年写 一軸

内務省旧蔵 「請求番号一八五・〇五八一」

本資料は波丹（バタン諸島）から漂着した人々の風俗資料。武蔵石寿の奥書がある。手彩色。卷子装。一軸。

高さ二七・〇糎でやや小型。但し、世界地図の部分のみ、高さ三一・五糎のところを、天部を内側へ折り返して他の料紙と高さを揃えている。表紙は朱色地唐草文様を印刷で出したもの。題簽（一三・五糎×二・〇糎）は無地の料紙で、外題は墨書してある。

着目すべきは奥書で、本文末尾に「文政元年戊寅九月写之／武蔵石寿」とある。これにより本資料は武蔵石寿の手によって書写されたものだとわかる。

武蔵石寿は、幕臣であると同時に貝類・鳥類などの研究に力を注いだ博物学者・本草学者であった。寛政三年に家督を継ぎ、甲府勤番となり、本資料の書写された文政元年には新御番になり、江戸牛込に居住した。富山藩主前田利保のもと楮鞭会での研究に励むようになったのは主に致仕のの

ちで、弘化元年に貝類の図鑑である『目八譜』を刊行させた。他に『本草  
迂説』『増補魚譜』『増補菌譜』『竹譜』などの著作がある。

本資料の冒頭には「武蔵石寿庫中」の陽刻印がある。また奥書部分にも  
武蔵石寿の印「竹石主人武蔵吉恵印」「翫何翁」「武蔵石寿」が捺されてい  
る。

本資料は明治一四年に政府が購入した。

#### 【書誌】

外題・「波丹人図」無地料紙題簽（二二・〇糎×二・五糎）に墨書

内題・なし

表紙・朱色地唐草文様（刷）表紙

高さ・二七・〇糎（一部三二・五糎）

印記・「大日本帝国図書印」「日本政府図書」「明治十四年購求」「武蔵石

寿庫中」「竹石主人武蔵吉恵印」「翫何翁」「武蔵石寿」

備考・楮紙、手彩色

#### 【写年・書写者】

前述の通り、文政元年に武蔵石寿によって書写されたもの。

【一八三】四十二国人物図説 弘化四年序 一軸

内務省旧蔵 「請求番号一八六・〇七六〇」

本資料は、享保八年に出版された外国風俗の図鑑『四十二国人物図説』

を絵巻に仕立てたもの。別名『万国人物図』。手彩色。一軸。

各国ごとに男女の姿を描き、その風俗を載せる。また注記があり、国名  
やその位置、気候風土などが書かれている。元になった資料ははつきりし  
ないが、長崎にもたらされた外国人の手による資料と想像される。

作者は西川如見。長崎の人で、諸外国との貿易で財を成した家に生まれ  
た。朱子学、天文学の道を志し、特に天文学に関しては享保三年に八代将  
軍徳川吉宗の下問を受けるほどの学者となった。元禄八年には世界地誌『華  
夷通商考』を完成させ、これは当時のベストセラーとなった。ほかに天文  
学に関する著作を多く残している。享保九年に七七歳で没した。本資料の  
元となった版本は、亡くなる前年に出版されたもの。

版本は大人気となり、版を重ね、改訂版なども如見の没後に製作されて  
いる。これらの影響下に絵巻も多くつくられ、本資料はそのうちのひとつで  
あるということが出来る。

本資料の序跋は共に、天保一三年に來日した清の書画家華昆田の手によ  
るもの。華昆田は南宋画を能くした人物で、本資料に見える「蘭徴」「呉越  
王孫」などの印記は華昆田の用いたものである。

#### 【書誌】

外題・なし

内題・「萬国図」

表紙・砥粉色（織）表紙

高さ・二七・五糎

印記・「大日本帝国図書印」「蘭徴」「呉越王孫」

備考・楮紙、手彩色

【写年・書写者】

華昆田の序文には「道光二十七年仲春朔日」の年記が見え、序文は弘化四年の写であることが推定される。

【一八四】蛮国幡印 写年不明 一軸

昌平坂学問所旧蔵 「請求番号一八五・〇五八二」

本資料は、世界各国の旗の一覧表。手彩色。一軸。

各国の旗が表に並べられており、国名などの注記が示されている。英語・オランダ語の注記で、日本語は書かれていない。元の資料は不明だが、海外からもたらされた資料を日本人が書写したものと想像される。

【書誌】

外題・なし

内題・なし

表紙・香色地金揉箔表紙

高さ・二八・〇糎

印記・「編脩地志備用典籍」「秘閣図書之章」「日本政府図書」（蔵書票）

備考・楮紙、手彩色

【写年・書写者】

奥書を欠くため写年・書写者ともに不明。

【一八五】朝鮮風俗絵巻物 写年不明 一軸

内務省旧蔵 「請求番号一七八・〇六八〇」

本資料は、李氏朝鮮時代の人々の衣服など風俗を図示した絵巻。手彩色。

絹本。一軸。

本資料には詞書や奥書がないため、来歴などは不明。ただし用いられている料紙が絹本であることや、筆致などから見て、一流の絵師の手によるものであることが想像される。

描かれている人物は、武人や楽人で、末尾には船が描かれている。これらから想像するに、朝鮮通信使の風俗を基にして描いたものであると考えられる。

目録題は外題に基づく。無地の題簽（一六・三糎×二・〇糎）に隸書体で墨書。

見返しは金揉箔料紙。絹布が楮紙で裏打ちされており、天地に〇・五糎ほど遊びがある。この部分が朱色で染められている。

本資料は明治一二年に政府が購入したもの。

【書誌】

外題・「朝鮮風俗絵巻物」無地料紙題簽（一六・三糎×二・〇糎）に墨書

内題・なし

表紙・香色地唐草文様（織）表紙

高さ・三〇・〇糎

印記・「大日本帝国図書印」「日本政府図書」「明治十二年購求」

備考・絹本、手彩色



【写年・書写者】

奥書を欠くため写年・書写者ともに不明。

【一八六】朝鮮人官服並武器 明治九年写 一軸

内務省旧蔵 「請求番号一七八・〇六八二」

本資料は前掲資料同様、李氏朝鮮時代の風俗を图示したものが、官服や武器などに特化している点の特徴。また人物図ではなく、服や冠など、構造を図解したもの。

本文料紙は薄様の楮紙で、裏打ちはされていない。表紙も本文料紙とほぼ同じ厚さの楮紙を用いており、軸も簡易的なものである。

元となった資料は文化十年に書写されたもので、明治九年に内務省によって模写された。

【書誌】

外題・「朝鮮人官服並武器」無地料紙題簽（二〇・五糎×一・三糎）に墨書

内題・なし

表紙・無地料紙（楮紙）

高さ・二七・〇糎

印記・「大日本帝国図書印」「日本政府図書」

備考・楮紙、手彩色

【写年・書写者】

奥書は以下の通り。

「文化十癸酉年之秋惠篤写之／明治九年七月十日以浅尾国治所蔵本写之／内務少丞六位岡谷繁実督／写図掛十四等出仕 鈴木仙太郎／写 中野其明／校 川尻金生／同 内藤誠」  
名前の下にはそれぞれ、当人の印が捺されている。

【一八七】日光道中記 写年不明 三軸

太政官正院地志課・地理寮地誌課・内務省地理局旧蔵

「請求番号二六二・〇〇八一」

日光街道の街道沿いの様子を描いた地誌。手彩色。三軸（一部欠）。

街道と宿場の様子を道なりに描いている。日光街道は日本橋を起点に日光東照宮に至る道を指すが、本資料の上巻は、上野村・古ヶ場村（現在の埼玉県さいたま市岩槻区周辺）の境から始まる点からみて、図の一部を欠いていることが想像される。

目録題は外題から採ったもの。金泥の料紙を用いた題簽（五・七糎×一・三糎）に「日光道中記」と墨書されている。三軸とも同筆の外題。

料紙の高さは二〇・〇糎で、絵巻としては小型の類である。

「地誌備用図籍之記」の印記から、内務省地理局の旧蔵であったことがわかる。

【書誌】

外題・「日光道中記」 金泥料紙題簽（五・七糎×一・三糎）に墨書。

内題・なし

表紙・青鈍色（織）表紙

高さ・二〇・〇糎

印記・「日本政府図書」「地誌備用図籍之記」

備考・楮紙、手彩色

【写年・書写者】

写年・書写者ともに不明。

【一八八】 厳島細景 刊年不明 一軸

太政官正院地志課・地理寮地誌課・内務省地理局旧蔵

〔請求番号一七五・〇二〇七〕

安芸の厳島神社周辺の景物を描いたもの。整版だが刊年は不明。一軸。彩色はされていない。

厳島を俯瞰で描いたものを二図収録する。一図目は西北から見た厳島で、厳島神社本宮が正面に描かれている。二図目はその反対側、東南の方向から描いたものである。全体は整版で印刷されているが、地名については、墨書した紙片がそれぞれの場所に貼り付けられている。

目録題は外題から採ったもの。無地料紙の題簽に「厳島細景」と、隸書体で墨書してある。

本資料も前掲資料同様「地誌備用図籍之記」の印が見られ、内務省地理局の旧蔵であることがわかる。

紙背に「金声堂」の朱印と、符丁と見られる墨書がある。ここから内務省が購入したものか。

【書誌】

外題・「厳島細景」 無地料紙題簽（一八・五糎×二・二糎）に墨書

内題・なし

表紙・香色（織）表紙

高さ・二八・三糎

印記・「日本政府図書」「地誌備用図籍之記」「川俣文庫」

備考・楮紙

【写年・書写者】

刊年・刊行者ともに不明。

【一八九】 集古図 藤原貞幹 写年不明 二八軸

昌平坂学問所旧蔵 〔請求番号二六二・〇〇四七〕

本資料は石器などの考古学的遺物を、分類・整理した上で図示した著作で、国学者である藤原貞幹によるものの模写。一部手彩色。二八軸。

藤原貞幹は古代の文物に関心を示し、考古学的遺物を中心に調査・研究を行った学者である。通称は藤原貞幹。裏松固禪の『大内裏図考証』の執筆

を助け、寛政新内裏復古の考案に関わるなどの功績を残した。考古学的な実証を主張し、それが本資料のような大著に結び付いたが、天明元年に発表した『衝口発』は、杜撰な論証が目立ち、本居宣長らをはじめとする国学者たちから大きな反発を招いた。寛政九年に六六歳で没。『集古図』は未完である。

外題は無地料紙の題簽に墨書で「集古図」とあり、その下に分類目録名が出されている。二八軸の分類はそれぞれ順に、

- ①「天文地理」②「文房」③「刀劍」④「碑銘」⑤「輿輦」⑥「欠」⑦「扁額」⑧「鳥魚」⑨「糕餅」⑩「粉本二枚」⑪「褥席」⑫「木器」⑬「錦綾布帛」⑭「矛戟」⑮「扁額」⑯「葬具」⑰「鉄器」⑱「銅器」⑲「鈴印」⑳「錢幣」㉑「食器」㉒「矛戟」㉓「度量」㉔「磁器」㉕「服飾」㉖「瓦器」㉗「扁額」㉘「石器」㉙「玉器」

表紙に「類抄叢聚」の紙片と、「番外書冊」の墨印があることから昌平坂学問所の旧蔵であったことが推定される。

#### 【書誌】

外題・「集古図」無地料紙題簽（二四・八糎×一・八糎）に墨書

内題・「集古図」

表紙・縹色地唐花文様（刷）表紙

高さ・二八・五糎

印記・「日本政府図書」「浅草文庫」「番外書冊」「類抄叢聚」ほか不明朱印

備考・楮紙

#### 【写年・書写者】

写年・書写者ともに不明。

【一九〇】東大寺宝物図 大久保忠寄写 安永九年 一軸

昌平坂学問所旧蔵 「請求番号二六二一・〇〇三九」

本資料は正倉院所蔵の宝物を図解した資料で、安永九年に大久保忠寄によつて書写された。手彩色。一軸。

冒頭に正倉院が所蔵する宝物のうち、五七品の目録が挙げられている。そのあとに、蘭奢待をはじめとする宝物の絵が順に描かれている。彩色は部分。寸法などの書き込みも見られる。

内題を「南都東大寺宝物図」とする。表紙には四周単辺の刷題簽が貼付されているが、表紙の汚損がひどく、外題は消えてしまっている。料紙は高さ四〇・〇糎で大型。

元奥書によれば、一乗院宮（一乗院は興福寺の塔頭のひとつで、江戸時代は皇族が門跡を務めた）に伝来した本を元禄八年に書写し、さらにそれを安永九年に写した。同名の資料は静嘉堂文庫や国立東京博物館など、多く伝来している。

書写者は幕臣の大久保忠寄。明和七年に徳川家治に謁し、寛政三年に家督を継いで同六年に大番に列した。故実について検証した著作を多く残している。通称を保次郎。主計・主水と称した。号は西山。本資料の奥書では本姓を用い、藤原忠寄としている。寛保二年の生まれであることはわかっているが、没年は不明。

【書誌】

外題・欠

内題・「南都東大寺宝物図録」

表紙・香色表紙

高さ・四〇・〇糎

印記・「編脩地誌備用典籍」

備考・楮紙

【写年・書写者】

奥書は以下の二種。

「這東大寺正蔵院／天平御道具図一卷以一乘院宮／本写之／元禄乙亥十月下旬（花押）」

「小谷守本之蔵本乞受写畢／安永九年庚子五月／藤原忠寄」

【一九一】正倉院御宝物図 写年不明 二軸

内務省旧蔵 「請求番号二六二・〇〇四一」

本資料も前掲資料同様、東大寺正倉院に伝来する宝物を図示した資料である。内容は同一だが、本資料のほうがより絵が巧み。写年不明。手彩色。二軸。

本資料の料紙は楮紙で、裏打ちがされていないため、模本として製作されたことが想像される。前掲資料と大きく異なるのは、「附巻」として二軸目が存在することである。ここに図示された資料は「鳥毛立女図屏風」な

ど、前掲資料には載せられていないものである。一軸目の外題は、金泥で塗った料紙の上に墨書されているのに対し、二軸目は打付書。

明治一五年に政府が購入したものである。

【書誌】

外題・①「東大寺御宝物図」金泥料紙（二六・〇糎×三・五糎）、②「東大寺御宝物図附巻」打付墨書

内題・なし

表紙・紺色表紙

見返し・銀揉箔

高さ・三九・二糎

印記・「明治十五年購求」「大日本帝国図書印」「日本政府図書」  
備考・楮紙、手彩色。

【写年・書写者】

奥書を欠くため、写年・書写者ともに不明。

【一九二】法隆寺宝物図 写年不明 三軸

内務省旧蔵 「請求番号二六二・〇〇四五」

本資料は法隆寺に伝来する宝物を図示した資料。手彩色。三軸。

外題は「法隆寺宝物図」で、三軸それぞれ「上」「中」「下」とある。金揉箔を散らした雲紙に隸書体で墨書しており、表紙も金茶色地雷門繋の織

を用いており、装丁は豪華である。見返しも金が散らしてあり、裏打ちには雲母が引いてある。ただし本文の料紙そのものは楮紙である。

【書誌】

外題・「法隆寺宝物図 上（下）」金揉箔雲紙料紙題簽（一八・〇糶×二・三糶）に墨書  
内題・「法隆寺宝物図」  
表紙・金茶色地雷文繫（織）表紙  
見返し・金揉箔  
高さ・三七・〇糶  
印記・「大日本帝国図書印」「日本政府図書」  
備考・楮紙、手彩色。

【写年・書写者】

奥書を欠くため、写年・書写者ともに不明。

【一九三】大臣影 狩野中信 文久三年写 二軸

内務省旧蔵 [請求番号二六二・〇〇三七]

本資料は宮内庁書陵部が所蔵する『天皇撰関大臣影図巻』三巻のうち、「大臣影」の巻を模写した図巻。手彩色。二軸。

『天皇撰関大臣影図巻』は、鎌倉～南北朝時代に製作された肖像絵巻で、歴代の天皇・撰関・大臣を時代順に配列している。「天皇影」「撰関影」「大

臣影」の三巻から成っており、本資料はこのうちの「大臣影」を模写し、二軸に分けたもの。

一軸目は花山院左大臣と称された藤原家忠から大炊御門右大臣藤原師経まで四〇図、二軸目は醍醐太政大臣九条良平から今出川右大臣菊亭兼季まで四〇図、計八〇図である。

本資料の奥書によれば、宝永六年に近衛家が所蔵している模本（陽明文庫所蔵）を書写したものを、さらに文久三年になって写したものであるらしい。

もとは、似絵の流派である藤原隆信の系譜に連なる藤原為信・豪信らの手に拠って製作された図巻だが、二〇〇年に渡って書き継がれて完成したといわれ、特に「大臣影」は豪信自身の奥書から豪信のみによって描かれたことがわかっている。本資料も、この豪信の元奥書を載せている。

本資料は裏打もされておらず、また軸もない。本来は冊子の表紙にするはずの朱色の料紙を丸めて、軸の代わりになっている。簡易的な装丁だが、奥書によれば幕府御用絵師である狩野中信の手による書写であると想像され、絵も極めて巧みである。

【書誌】

外題・「大臣影 二巻之内上（下）」打付墨書

内題・なし

表紙・朱色表紙

高さ・二七・五糶

印記・「大日本帝国図書印」「日本政府図書」

備考・楮紙、手彩色

【写年・書写者】

本資料の奥書は、以下の三種である。

「大臣影篆信法印筆也／銘染愚筆之不可出門外／（花押）」

「大臣八十人像在陽明藤太閣之／家焉其像則僧篆信所画而其跋語／未詳其人也云画様字体一照原本／掲写著色装成二卷藏之於／東武秘府／宝永六年十月十八日」

「以木挽丁模本全楽写 文久三亥年七月成」

文久三年の奥書は、他の二種と異なり軸の間際に小さく書かれている。

木挽町狩野家のうち、全楽斎を号したのは幕末から明治にかけて活動した狩野中信である。通称は薫四郎、号は幸川、董川。母は幕臣であった成島司直の女。明治四年に六一歳で没。

【一九四】神代石之図 木内石亭写 写年不明 一軸

内務省旧蔵 「請求番号二六二一・〇〇三八」

本資料は石器を中心とした考古学的遺物を図示した図巻で、奇石の収集家として知られる木内石亭の自筆本。手彩色。一軸。

全国各地の神社などに伝わる石器や、出土品、自ら収集した奇石などが、所蔵先・寸法・材質などと共に描かれている。序文は石亭の自序。

高さ一四・〇糎の小型の図巻だが、縹色地の表紙や金切箔の見返しなど装丁は良い。

木内石亭は、江戸時代中期の本草学者。近江下坂本の生まれで、母の実家である近江栗太郡山田の木内家を継いだ。本草学を津島如蘭から学んで

いる。幼少期から奇石を収集し、全国各地を旅して所蔵品は二〇〇〇種以上に及んだという。また弄石社を結成し、全国の愛石家たちの中心となった。これらの研究は『雲根志』をはじめとする著作にまとめられ、のちの日本の考古学・博物学の基礎を形作った。

本資料は明治一四年に内務省が購入したもの。

【書誌】

外題・「神代石之図」無地料紙題簽（一〇・〇糎×二・五糎）に墨書

内題・「神代石之図」

表紙・縹色菱繫雲文（織）表紙

高さ・一四・〇糎

印記・「大日本帝国図書印」「日本政府図書」「明治十四年購求」

備考・楮紙、手彩色

【写年・書写者】

本文料紙の冒頭に、「木内重暁自筆」と墨書された付箋（八・〇糎×一・二糎）が貼付されている。「重暁」は石亭の諱。本文冒頭も「湖東／石亭主人」による自序である。

写年については年記がないため、不明。

【一九五】小金原御狩之記 三上季寛写 寛政七年写

内務省旧蔵 「請求番号一五四・〇四六九」

本資料は寛政七年に、第一代將軍徳川家斉が行った小金原御鹿狩の様子を描いた絵画資料。幕臣の三上季寛の手に拠る。手彩色。一軸。

小金原（現在の千葉県松戸市にあった小金牧）では、第八代將軍徳川吉宗や第一二代將軍徳川家慶らによる大規模な鹿狩が行われた。將軍の娯楽・示威の側面が強いが、害獣駆除や野犬対策の意味も大きかったといわれている。吉宗以来、多くの勢子が駆り出され、広範な地域から獲物の追い込みがされた。

本資料は寛政七年、家斉が実施した際の記録。前半部分に両国橋から小金原を目指す御成道の様子や、狩場の様子が俯瞰で描かれ、彩色も施されている。後半部分は本文のみ。

奥書に拠れば本資料を書写したのは、幕臣の三上季寛。

【書誌】

外題・「小金原御狩之記」無地料紙題簽（二七・〇糎×二・二糎）に墨書

内題・なし

見返し・紺地金切箔

表紙・縹色地雲文繫（織）表紙

高さ・二四・〇糎

印記・「日本政府図書」

備考・楮紙、手彩色

【写年・書写者】

奥書は以下の通り。

「于時寛政七乙卯孟夏三日／從五位下因幡守源季寛」

これによれば写年は寛政七年の五月三日で、書写者は幕臣の三上季寛。奥書にある源は本姓。安永二年小納戸となり、天明八年に遺跡六百石を継ぐ。寛政四年に従五位下、因幡守。のち、先弓頭、盜賊追捕、作事奉行、宗門改を歴任。文化三年に六六歳で没。

【一九六】四季遊獵図 河尚明（河島雪亭）写 寛政一三年写 二軸

内務省旧蔵 「請求番号一五四・〇四六八」

本資料は絵師である河島雪亭の手に拠る遊獵図。四季の折々の狩場の風景が描かれている。手彩色。二軸。

前掲資料と異なり、季節の風物として鷹狩や漁労の様子を捉えた絵画資料。冬の薄氷の張った田畑や、桜の咲く春の野辺などが描かれている。景色の中に、獲物となる鶴などの野鳥、それを追う勢子などの様子が見え、記録的性格の強い前掲資料に比べ、抒情性豊かな内容であるといえる。

高さ二八・二糎の料紙で、紙背には雲母が引かれている。

奥書によれば、元の資料は蜷川家が所蔵していた狩野典信によるもの。これを基に、河島雪亭が書写したが、元の資料は現存が確認されていない。本資料は明治一四年に政府が購入したものである。

【書誌】

外題・「四季遊獵図」金泥草花文様料紙題簽（二六・五糎×三・二糎）に墨書

内題・なし

見返し・金揉箔

表紙・浅葱色地流雲鳳凰文様（刷）表紙

高さ・二八・二糎

印記・「大日本帝国図書印」「明治十四年購求」「日本政府図書」「尚明」

備考・楮紙、手彩色

【写年・書写者】

奥書は一軸目の末尾に書かれている。

「蜷川氏家蔵以栄川院／法印典信図画大塚氏為／需画之于時寛政十三年／庚申季春／雪亭河尚明」

「大塚氏」の求めに応じて、河尚明（河島雪亭）が寛政一三年三月に、狩野典信の手に拠る図を書写したという。旧蔵者である蜷川家は、徳川家康の御伽衆として仕えて以来、旗本として存続している。天明七年に蜷川親文（従五位下相模守、通称に新十郎・金十郎）が田安家の家老となっており、この頃河尚明も田安家に仕えていたらしいことから、接点が想像される。但し、河尚明については詳細ははっきりしない。『無名翁随筆』の後藤茂右衛門条に「田安侯の画師なり、雪舟画孫なり」と見え、寛政から天保のころまで活動したことがわかっている。

狩野典信は木挽町狩野家の第六代で、この典信の代に木挽町にあった田沼意次の旧宅を与えられたことから、遡って狩野尚信にはじまる家系を木挽町狩野家と称するようになった。栄川院は号。徳川家治の寵を受け、法

印に叙せられる。

【一九七】刀劔図 写年不明 二軸

内務省旧蔵 「請求番号一五四・〇四五六」

本資料は、各地の寺社が宝物として所蔵している刀劔を図示、解説したものの一部手彩色。二軸。

刀劔はそれぞれ由緒があり、例えば『平家物語』『太平記』の「劔の巻」に登場するものや、曾我兄弟ゆかりのものなど。いずれもその形が図示されている他、色や大きさ、由緒が明記されている。これらの情報はそれぞれ異なる時期に収集されたもので、記された年記には大きな開きがある。上限は万治三年で、下限は寛政一二年。筆者も異なるようである。

本資料は明治一三年に政府が購入したもの。二軸ともに、それ以前の旧蔵者のものとみられる陽刻印「空齋書屋」（五・三糎×一・七糎）が捺されている。

【書誌】

外題・「刀劔図」打付墨書

内題・なし

見返し・金切箔

表紙・金茶色地唐草文様（織）表紙

高さ・二七・〇糎

印記・「内閣文庫」「明治十三年購求」「空齋書屋」「大日本帝国図書印」



〔裏〕「日本政府図書」〔裏〕

備考・楮紙、手彩色

【写年・書写者】

本資料は奥書を欠くため写年・書写者ともに不明。

【一九八】三池御腰物図 寛政七年写 二軸

浅草文庫旧蔵 「請求番号一五四・〇一八九」

本資料は久能山東照宮が所蔵する宝刀を図示した資料。一部手彩色。二軸。

目録題の「三池御腰物図」は本資料が収められている箱の蓋に墨書されているもの。本資料の冒頭が、刀工の三池光世の手に拠ると伝えられている刀の図であることから採られたと考えられる。しかし本資料には伝三池作の刀のほかにも、多くの太刀が図示されている。「雄御太刀恰好有形絵図」には、地に紙が継がれた箇所が二点あり、そこに太刀の緒が描かれている。これは料紙の広さが足りなくなったために、やむなく紙を継いだものと考えられる。

図のほかにも、細部の拡大や寸法などが記載されている。前掲資料と異なる点としては、由緒に関する文がないこと。

本資料は、二軸がひとつの箱に収められている。箱は、縦三五・五糎×横一七・〇糎×高一〇・六糎で、蓋に「三池御腰物図」と墨書されている。

【書誌】

外題・なし

内題・なし

見返し・金切箔

表紙・紺色（織）表紙

高さ・二七・三糎

印記・「浅草文庫」「日本政府図書」

備考・楮紙、手彩色

【写年・書写者】

本資料の奥書は以下の通り。

「卯十一月／久能山／御宮清別当／德音院」

本資料の写年は寛政七年と思われる。

【一九九】水戸東照宮御蔵宝太刀之図 写年不明 二軸

内務省旧蔵 「請求番号二六二・〇〇三〇」

本資料は水戸東照宮が所蔵する宝刀を図示、解説したものである。一部手彩色。二軸。

外題は打付書で出しているが、①「水戸東照宮御蔵宝太刀之図 下巻」、②「水戸東照宮御太刀之図 上巻」となっており、上下巻と冊次番号が反対になっている。また一軸目は、天地が逆様の状態で内閣文庫の蔵書表が貼られている。

表紙は香色表紙で、現在は紐が失われているが、色落ちしたと見え、紫色の跡が表紙に残っている。見返しは縦刷毛目の文様。  
内務省の旧蔵。

【書誌】

外題・①「水戸東照宮御宝太刀之図 下巻」、②「水戸東照宮御宝太刀之

図 上巻」

内題・なし

見返し・縦刷毛目

表紙・香色表紙

高さ・二六・三糎

印記・「大日本帝国図書印」「日本政府図書」

備考・楮紙、手彩色

【写年・書写者】

本資料には奥書がないため、写年・書写者ともに不明。

【二〇〇】弓矢之図式 伝真壁房行写 写年不明 一軸

旧蔵者不明 「請求番号一五四・〇四五七」

本資料は弓矢を図示した資料。手彩色。一軸。孤本。

冒頭には種類別に弓を配列し、寸法・名称や、用いるべき場所や時期などが書き込まれている。後半は矢で、弓と同様に寸法・名称などで分類して配列している。彩色は朱のみを用いている。

表紙は紺色布目型押表紙で、見返しには雲母引の布目紙に金切箔をまぶ

した料紙を用いている。本文料紙も斐紙を用いており、筆跡も能書で、全体的に高級な装丁であることがいえる。

題簽には「弓矢之図式 真壁房行筆」とあるが、真壁房行なる人物についてのはつきりしない。

「日本政府図書」の印が三箇所捺されているほかには蔵書印らしきものは見当たらず、旧蔵者も不明である。

【書誌】

外題・「弓矢之図式 真壁房行筆」無地料紙題簽（一三・二糎×二・五糎）に墨書

内題・なし

見返し・布目型押雲母引料紙に金切箔

表紙・紺色布目型押表紙

高さ・三四・五糎

印記・「日本政府図書」（計三箇所）

備考・斐紙、朱入り

【写年・書写者】

本資料には奥書がないため、写年・書写者ともに不明。

【二〇一】大銃図 写年不明 一軸

昌平坂学問所旧蔵 「請求番号一八九・〇五二」

本資料は大砲を图示した砲術の資料。手彩色。一軸。孤本。

江戸時代後期に輸入された西洋式の大砲、カロナーデ砲・モルチール砲・ホウキツスル砲をそれぞれ五分の一スケールで图示している。(内題に付す形で「但右比例尺度以二寸為一尺云」とある。)砲身や砲台のみならず、銃筈・薬匙・火薬桶・砲弾など、周辺諸器なども詳細に描かれている。

カロナーデ砲、モルチール砲、ホウキツスル砲はそれぞれ、射撃角度や砲弾の種類によつて分類されるもので、江戸時代後期から幕末の動乱期にこぞつて将来されたものである。本資料の表紙には、昌平坂学問所が分類のために用いていた墨印「番外書冊」が捺されており、貴重な資料として本資料が学問所に収められたものと想像される。

【書誌】

外題・「大銃図」打付墨書

内題・葛論奈的(カロナーデ)砲 模尔底兎(モルチール)砲 訶烏微都兎  
(ホウキツスル)砲／五分一之図／但右比例尺度以二寸為一尺云

表紙・縦刷毛目表紙

高さ・三七・〇糎

印記・「日本政府図書」「内閣文庫」「浅草文庫」「番外書冊」

備考・楮紙、手彩色

【写年・書写者】

本資料には奥書がないため、写年・書写者ともに不明。